

富山市埋蔵文化財調査報告128

富山市

ひらき が おか なか
開ヶ丘中遺跡

ひらき が おか きつね だに
開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

発掘調査報告書

一県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）

2003

富山市教育委員会

富山市

ひらき が おか なか
開ヶ丘中遺跡
ひらき が おか きつね だに
開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡
発掘調査報告書

一県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）

2003

富山市教育委員会

例 言

1. 本書は、富山市開ヶ丘地内に所在する開ヶ丘中遺跡（市 No. 449）、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡（市 No. 455）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営畑地帯総合整備事業に伴うもので、事業主体である富山県農地林務事務所耕地課の依頼を受けた富山市教育委員会の委託監理のもと山武考古学研究所が実施した。
3. 各遺跡の所在地、調査面積、調査担当者、調査期間は下記の通りである。

遺 跡 名	所 在 地	調査面積	調査担当者	調査期間
開ヶ丘中遺跡	富山市開ヶ丘字紙袋田94-1外	1,750m ²	平岡和夫 武部喜充	平成14年11月11日～ 同年12月25日
開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	富山市開ヶ丘字狐谷152外	1,000m ²	平岡和夫 棚谷 優	平成14年11月11日～ 同年12月25日

4. 本書の執筆は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター学芸員近藤顕子、山武考古学研究所員棚谷優、武部喜充、土生朗治、湯原勝美が行った。なお、執筆分担は、序章第1・2節は近藤、序章第3節は武部・棚谷、第1章第1節は武部、第1章第2・3節は武部・土生、第2章第1節は棚谷、第2章第2・3節は棚谷・湯原である。
5. 自然科学分析については、バリノ・サーヴェイ(株)、(株)古環境研究所に依頼し、その報告を附章に収録した。また、開ヶ丘中遺跡の墨書土器については、新井重行氏（東京大学大学院）に判読を依頼した。
6. 発掘及び整理調査にあたり、下記の諸氏、諸機関にご教示とご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。（敬称略）

天坂結範 新井重行 呉羽射水山ろく用水土地改良区 富山県埋蔵文化財センター
富山県農地林務事務所 (株)日本テクニカルセンター (株)東日本重機

7. 発掘及び整理調査参加者は下記の通りである。（順不同）

青木千賀子 荒井美子 荒木末子 伊泉榮一 上沢智香子 梅山淳 岡田うめ 岡本憲昭
小串結二 小津さと子 梶山義昭 加藤利秋 木原そとえ 栗原幸男 小林ちか子 斉藤みつ子
桜井謙哉 佐藤和夫 佐藤京子 庄司宗和 須藤和春 関谷智己 高木よし美 田中恵美
田村小百合 寺井 守 寺島憲久 戸部孝一 中島トミ子 萩野真義 萩原真理子 平川元信
福田恵子 堀田和子 本田富子 真野等 山下忠雄 米田光子 六本木恭子

凡 例

1. 本書で使用した地形図は、第1図が国土地理院作成2万5千分の1「富山」・「速星」・「高岡」・「宮森新」、第2図が1万分の1「富山市No. 4」、第3図が2千5百分の1「富山市基本図58-2」・「富山市基本図59-2」である。
2. 位置図・地形図・遺構実測図中の方位は座標北を示す。
3. 土層説明及び遺物観察表の色調の記載は、1996年農林水産省農林水産技術会事務局監修の『新版標準土色帖』に拠る。
4. 本書の挿図縮尺は下記の通りである。

遺跡全体図	開ケ丘中遺跡	1/600、開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡	1/400
遺構実測図	竪穴住居跡	1/60、炉跡	1/30、立石
		1/20、土坑	1/40
遺物実測図	縄文土器	1/3、土師器・須恵器	1/3、土製品
		1/3・2/3、石器	1/3・1/6
5. 本書の遺物写真の縮尺は、図面縮尺とほぼ同じである。
6. 遺構番号は、現地調査時に付したものをそのまま使用した。
7. 遺構・遺物実測図中で使用した記号・スクリーン・トーンは以下の内容を示す。

開ケ丘中遺跡	遺構実測図	地山	土器 ● 自然石 ■
	遺物実測図	黒色処理	
開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡	遺構実測図	地山	焼土
		土器 ● 土製品 ○ 石器 △ 自然石 ■	
	遺物実測図	土偶欠損部分	石器磨面

目次

例言

凡例

序章

第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 調査の経緯	5
第3節 調査の方法と経過	5
1. 発掘調査の方法	5
2. 整理調査の方法	5
3. 調査の経過	6
第1章 関ヶ丘中遺跡	
第1節 遺跡の立地と概要	8
第2節 検出された遺構と遺物	9
1. 土坑	9
2. 遺物包含層	10
3. 出土遺物	10
第3節 まとめ	17
第2章 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	
第1節 遺跡の立地と概要	21
第2節 検出された遺構と遺物	21
1. 竪穴住居跡	21
2. 立石	34
3. 土坑	34
第3節 まとめ	38
附章 自然科学分析	
第1節 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の微細分析と放射性炭素年代測定	40
第2節 関ヶ丘中遺跡・関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡における蛍光X線分析	42

挿図目次

第1図 周辺の遺跡位置図	2	第10図 包含層出土遺物(4)	14
第2図 関ヶ丘地内の遺跡位置図	3	第11図 包含層出土遺物の数量分布図	18
第3図 関ヶ丘中遺跡と関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の 平成14年度調査区位置図	3	第12図 包含層出土遺物の種類別分布図	19
【関ヶ丘中遺跡】		第13図 集落遺跡と包含層出土遺物の時期的な比較	20
第4図 関ヶ丘中遺跡全体図	7	【関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡】	
第5図 基本堆積土層	8	第14図 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡全体図	22
第6図 SK128-132	9	第15図 SI02(1)	24
第7図 SK129-130-132、包含層出土遺物(1)	11	第16図 SI02(2)	25
第8図 包含層出土遺物(2)	12	第17図 SI03	26
第9図 包含層出土遺物(3)	13	第18図 SI04(1)	27
		第19図 SI04(2)	28

第20図	SI02出土遺物	29
第21図	SI03出土遺物(1)	30
第22図	SI03出土遺物(2)	31
第23図	SI03出土遺物(3)・SI04出土遺物(1)	32
第24図	SI04出土遺物(2)	33

第25図	1号立石、SK01-09	35
第26図	SK10-21	36
第27図	1号立石・SK07出土遺物	37
第28図	土偶の類別	38

目次

表1	周辺の遺跡	2	表3	関ヶ丘中遺跡 出土遺物観察表	15
表2	県営緑地帯総合整備事業羽村水山ろく地区 埋蔵文化財一覧	4	表4	関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 石器計測表	34
			表5	関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 土坑規模一覧表	37

図版目次

【関ヶ丘中遺跡】		図版11	1. SI04 遺物出土状況
図版1	1. 関ヶ丘中遺跡 全景	2. SI04 全景	
	2. 関ヶ丘中遺跡 全景	3. SI04 完掘状況	
図版2	1. SK128 遺物出土状況	4. 1号立石 検出状況	
	2. SK129 遺物出土状況	5. 1号立石 完掘状況	
	3. SK130 遺物出土状況	6. SK01 完掘状況	
	4. SK131 遺物出土状況	7. SK02 完掘状況	
	5. SK132 遺物出土状況	8. SK03 完掘状況	
	6. 埋没小支谷包含層 遺物出土状況	図版12	1. SK04 完掘状況
	7. 埋没小支谷包含層 遺物出土状況	2. SK05 完掘状況	
	8. 谷底包含層 遺物出土状況	3. SK06 完掘状況	
図版3	SK129・130・132、包含層出土遺物(1)	4. SK07 完掘状況	
図版4	包含層出土遺物(2)	5. SK08 完掘状況	
図版5	包含層出土遺物(3)	6. SK09 完掘状況	
図版6	包含層出土遺物(4)	7. SK10 完掘状況	
【関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡】		8. SK11 完掘状況	
図版7	1. 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 遠景	図版13	1. SK12 完掘状況
	2. 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 全景	2. SK13 完掘状況	
図版8	1. SI02 遺物出土状況	3. SK15 完掘状況	
	2. SI02 遺物出土状況	4. SK16 完掘状況	
	3. SI02 遺物出土状況	5. SK17 完掘状況	
	4. SI02 石甕炉	6. SK18 完掘状況	
	5. SI02 全景	7. SK19 完掘状況	
図版9	1. SI03 遺物出土状況	8. SK21 完掘状況	
	2. SI03 遺物出土状況	図版14	SI02出土遺物・SI03出土遺物(1)
	3. SI03 遺物出土状況	図版15	SI03出土遺物(2)
	4. SI03 炉	図版16	SI03出土遺物(3)・SI04出土遺物(1)
	5. SI03 完掘状況	図版17	SI04出土遺物(2)、1号立石、SK07出土遺物
図版10	1. SI04 遺物出土状況	【関ヶ丘中遺跡】	
	2. SI04 石甕炉	図版18	墨書土器(47土師器壺)赤外線写真

序 章

第1節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

開ケ丘中遺跡・開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡は、いずれも富山市街地から南西約12kmの開ケ丘地区に所在する。開ケ丘地区は射水丘陵東部にあり、周辺には呉羽山丘陵・境野新扇状地・沖積平野が展開する。現在、周辺一帯は畑地が広がり果樹の栽培が盛んに行われている。地名として「開ケ丘」が成立したのは江戸時代後期と考えられ、丘陵西側の通称茨山を開発してできたことにちなみ、もとの村名を「開発村」と称した。

2. 各時代の概観

呉羽山丘陵西部から射水丘陵東部にかけては、河岸段丘・丘陵など起伏の多い地形を利用して旧石器時代～中世の遺跡が数多く営まれ、遺跡の分布密度が県内で最も高い地域として知られる。なかでも開ケ丘地区は、縄文時代中期と平安時代前期に遺跡の数が増大する。

【旧石器時代】 呉羽山丘陵・射水丘陵・境野新扇状地の各所に遺跡が分布する。境野新扇状地付近には境野新遺跡と向野池遺跡〔市教委2000a・b、2002c〕がある。向野池遺跡では濃灰流紋岩製尖頭器や黒曜石製細石刃核が採集され、中部高地系の細石刃文化が初めて県内で確認された〔市教委ほか2000〕。東方約500mの境野新遺跡では、東山系石刃技法によるナイフ形石器・剥片と瀬戸内系横長剥片剥離技法による剥片が出土した。その他、境野新遺跡・草山B遺跡〔小杉町教委1986〕ではまとまった量の剥片が出土し、杉谷F・H遺跡・新開遺跡・開ケ丘中遺跡・開ケ丘中山Ⅳ遺跡からはナイフ形石器が、杉谷F遺跡・平岡遺跡・千坊山遺跡からは尖頭器や有舌尖頭器が採集されている〔西井・藤田1976〕。

【縄文時代】 前期～後期には射水丘陵の各所に拠点的な集落が形成される。前期～中期にかけては羽根地区に平岡遺跡が営まれる。中期には丘陵地を中心に集落の形成が顕著となり、射水丘陵東部では開ケ丘中山Ⅲ遺跡〔市教委2002a〕・開ケ丘狐谷Ⅲ遺跡〔市教委1973〕、境野新扇状地上では北押川C遺跡（中期前葉）・池多東遺跡（中期後葉）・上堤池遺跡（中期後葉）・北押川B遺跡（中期）などの集落が形成される。後期になると羽根地区の二本榎遺跡で集落が営まれ、後期末から晩期にかけて開ケ丘地区の開ケ丘中山Ⅰ遺跡〔市教委2003b〕で数棟規模の集落が確認されているが、遺跡の数や規模は縮小する。

【弥生～古墳時代】 射水丘陵の羽根地区および呉羽山丘陵南部で墓域が集散的に形成される。古墳出現期には呉羽山丘陵の杉谷A遺跡〔市教委1975〕で方形周溝墓群が確認され、素環頭大刀や銅鏃、ガラス玉、鉄製工具、鉄素材などが副葬品として出土した。杉谷4号墳に代表される四隅突出墳や王塚古墳・勅使塚古墳といった大型前方後墳が築造される。

古墳時代中期には、詳細な時期は不明ながら、全長41mの前方後円墳の古沢塚山古墳が築造される。境野新遺跡〔市教委1974〕・古沢A遺跡〔市教委1983〕では中期中葉の集落が確認されており、古沢塚山古墳が当該期に築造された可能性も想定できる。

【古代】 射水丘陵北部から東部にかけて生産地帯（製陶・製鉄・製炭）としての側面を持つようになる。7世紀中頃～8世紀にかけて、開ケ丘中山Ⅴ遺跡〔市教委2002a〕・御坊山遺跡・上野南遺跡などで製鉄炉やそれに伴う炭窯、国史跡小杉丸山遺跡〔富山県教委1986〕・市史跡栃谷南遺跡〔市教委2002d〕で瓦陶兼窯が採集される。栃谷南遺跡からは大量の軒丸瓦の他に、琥珀製透彫り品・鍍金



第1図 周辺の遺跡位置図 (1:25,000)

表1 周辺の遺跡

No.	遺跡名	年代等	種別	No.	遺跡名	年代等	種別
1	関ヶ丘中	縄文・奈良・平安	集落・生産	22	桑野新	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安	集落・生産
2	関ヶ丘狐谷Ⅲ	旧石器・縄文・奈良・平安	集落・生産	23	向野池	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世	集落・生産
3	関ヶ丘中山Ⅲ	縄文・奈良・平安	集落・生産	24	稲谷F	縄文・古墳・平安	集落
4	関ヶ丘中山Ⅰ	縄文・奈良・平安	集落跡	25	杉谷H	旧石器・縄文・平安	生産跡
5	関ヶ丘狐谷Ⅱ	縄文・奈良・平安	集落・生産	26	平岡	旧石器・縄文・奈良・平安	生産跡
6	関ヶ丘中山Ⅱ	奈良・平安	集落・生産	27	北神川・喜ノ坂	縄文・奈良・平安	稲作遺跡(稲作)
7	関ヶ丘中山Ⅴ	縄文・奈良・平安・中世	集落跡	28	北神川C	縄文	集落跡
8	関ヶ丘狐谷Ⅰ	奈良・平安	敷布地	29	北神川B	縄文・奈良・平安	集落・生産
9	関ヶ丘狐谷Ⅳ	縄文・奈良・平安	集落跡	30	池多末	旧石器・縄文・奈良・平安	集落・生産
10	関ヶ丘ヤシキダ	縄文・奈良・平安	集落・生産	31	稲谷南	縄文・白鳳・奈良・近世	古墳(須磨古墳)
11	関ヶ丘南	奈良・平安	敷布地	32	平岡東跡	縄文・奈良・平安	生産(須磨跡)
12	関ヶ丘東Ⅱ	縄文・奈良・平安	敷布地	33	北神川東跡	奈良・平安	生産(須磨跡)
13	関ヶ丘東Ⅰ	縄文・奈良・平安	敷布地	34	軍任沼原跡	奈良・平安	生産(須磨跡)
14	関ヶ丘西ノ池	平安	敷布地	35	関ヶ丘中山南跡	奈良・平安	生産(須磨)
15	関ヶ丘西	縄文・奈良・平安	敷布地	36	山本原ノ木	縄文・奈良・平安	生産(須磨跡)
16	三瓶東	奈良・平安	敷布地	37	稲坊山	奈良・平安	生産(稲坊)
17	三瓶中山南跡	奈良・平安	生産(稲坊)	38	銀坊山南	奈良・平安	敷布地
18	三瓶中山北	中世	墳墓	39	豊谷城跡	中世	城跡
19	三瓶北塚群	中世	墳墓	40	草山B	旧石器・縄文・奈良・平安	集落跡
20	ガメ山	縄文・奈良・平安	敷布地	41	新岡		
21	上栗池	縄文・奈良・平安	集落跡	42	千坊山	古墳	古墳



第2図 開ヶ丘地内の遺跡位置図 (1 : 10,000)



第3図 開ヶ丘中遺跡と開ヶ丘孤谷遺跡の平成14年度調査区位置図 (1 : 5,000)

銅製品などの仏教関連の遺物も多く出土した。

須恵器窯は7世紀後半の平岡窯跡をはじめとし、8世紀代には北押川窯跡、山本藤ノ木窯跡、三熊中山窯跡、石名山窯跡など多くの窯が構築される。土師器焼成坑は、8世紀中頃に栃谷南遺跡、小杉流通業務団地内遺跡群 No.18遺跡 A 地区、同 B 地区、9世紀には向野池遺跡〔市教委2002c〕、ガメ山遺跡、開ヶ丘中遺跡〔市教委2002b〕で構築される。向野池遺跡では、井戸から土師質瓦塔が出土し、井戸の廃棄に伴う祭祀が行われたと考えられている。開ヶ丘中遺跡からは、土師質瓦塔、転用碗、鉄鉢といった仏教色の強い遺物や漆紙、墨書土器も出土し、山寺の所在が推測されている。(近藤)

表2 県営畑地帯総合整備事業員羽射水山ろく地区埋蔵文化財一覧

年度 (平成)	遺跡名	試掘調査後遺跡 確認面積 (m ²)	発掘調査面積 (m ²)	備 考
11	開ヶ丘中遺跡	8,300	—	
	開ヶ丘中山IV遺跡	8,040	—	
	開ヶ丘ヤシキダ遺跡	2,150	—	
	小計	18,490		
12	開ヶ丘中山IV遺跡	7,640	5,200	
	開ヶ丘西遺跡	2,480	—	
	開ヶ丘中山V遺跡	880	—	
	小計	11,000	5,200	
13	開ヶ丘中山IV遺跡	1,600	3,300	うち2,350m ² を(有)山武考古学研究所に委託
	開ヶ丘中山III遺跡	—	880	
	開ヶ丘中山II遺跡	7,000	—	
	開ヶ丘中山V遺跡	—	90	
	開ヶ丘中遺跡	13,000	11,263	(有)山武考古学研究所に委託
	開ヶ丘中山I遺跡	—	550	(有)山武考古学研究所に委託
	開ヶ丘狐谷遺跡	—	2,510	うち680m ² を(有)山武考古学研究所に委託、 1,690m ² を工事立会調査として行った
小計	21,600	18,593		
14	開ヶ丘中山III遺跡	320	450	
	開ヶ丘中山IV遺跡	0	508	大成エンジニアリング㈱に委託
	開ヶ丘狐谷III遺跡	—	7,802	うち6,162m ² を大成エンジニアリング㈱に、 1,000m ² を(有)山武考古学研究所に委託
	開ヶ丘ヤシキダ遺跡	0	701	
	開ヶ丘中山I遺跡	630	562	大成エンジニアリング㈱に委託
14	開ヶ丘狐谷IV遺跡	488	488	大成エンジニアリング㈱に委託
	開ヶ丘中遺跡	—	1,750	(有)山武考古学研究所に委託
	小計	1,438	12,261	
	合計	52,528	36,054	

第2節 調査の経緯

「県営畑地帯総合整備事業 呉羽射水山ろく地区」に伴う埋蔵文化財調査は、事業主体である富山県（耕地課）と、文化財担当部局である富山県教育委員会文化財課・富山市教育委員会（以下市教委とする）の三者で工事計画と埋蔵文化財保護に関する協議を行い、平成11年度から試掘確認調査及び発掘調査を進めている。

平成14年度においては、開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡の試掘確認調査を実施し、遺跡範囲の確認を行った。その結果を受けて、開ヶ丘中山Ⅰ遺跡・開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡・開ヶ丘ヤシキダ遺跡・開ヶ丘中遺跡の7遺跡について発掘調査を実施した。

また、一部の調査を民間発掘調査機関に委託し市教委はその監理を行った。調査の分担は表2のとおりである。調査費用は「農業基盤整備事業にかかる農林省と文化庁の覚書」第5項に基づく規定に従い、農家負担割合分15%については富山市が国庫補助金・県費補助金の交付を受けて実施した。（近藤）

第3節 調査の方法と経過

1. 発掘調査の方法

発掘調査は、試掘調査の結果によって設定された調査区を対象として実施した。開ヶ丘中遺跡、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の両遺跡に公共座標（第Ⅳ座標系）の網を被せた。また、両遺跡のグリッド呼称は公共座標の下三桁を用いた。

表土は原則として重機で除去し、包含層の掘り下げ及び遺構確認作業は人力で実施した。遺構平面図及び断面図の実測は、遺構の規模・内容に応じて1/10・1/20の縮尺で実施した。また、遺跡の地形に合わせて全体図に50cmコンターの等高線を入れた。

写真撮影は35mm判白黒ネガ、35mm判カラーネガ、35mm判カラーポジの各フィルムを用いて行い、状況に応じて6×7判カラーネガフィルムを使用した。遺跡全景写真はラジコンヘリコプターによる空中撮影とした。なお、今回の調査にかかわる図面・写真アルバム・遺物などの資料は、本報告書作成後は一括して富山市教育委員会埋蔵文化財センターが保管している。

2. 整理調査の方法

整理調査は山武考古学研究所が、発掘調査で得られた資料・遺物を対象にして実施した。出土遺物の総量は開ヶ丘中遺跡で大形収納箱20箱分、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡で大形収納箱35箱分である。

出土遺物は細片に至るまで全量水洗いした後、インクジェットプリンターを使用して注記を実施した。但し、注記不可能な微細片については注記したポリ袋に収納した。なお、注記には以下の略号を用いた。

開ヶ丘中遺跡……HGON 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡……HGOKⅢ
 竪穴住居……SI 土坑……SK 採集月日（2002年12月24日）……021224

例1）遺構内出土遺物

開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・2002年12月24日・1号竪穴住居遺物 NO1……HGOKⅢ・SI01-1・021224

例2）包含層出土遺物

開ヶ丘中遺跡・2002年12月24日・包含層 X580、Y-120……HGON・包X580、Y-120-021224

3. 調査の経過（発掘調査日誌抄）

開ケ丘中遺跡（平成14年11月11日～同年12月25日）

- 11月中旬 調査前は背丈以上の草木が調査区を覆っていた。草木伐採後、調査区にテーピングを行なった。
- 下旬 調査区の北側から表土除去を開始した。調査区は谷へ落ち込む急斜面と谷裾からなり、斜面には杉大木の根が在り、表土除去は予想以上に手間取った。
- 12月上旬 前月に引き続き、表土除去と遺構確認作業を行い、土坑5基、調査区中央部の埋没小支谷と斜面から谷裾にかけての広範囲に平安時代の遺物包含層を確認した。
- 中旬 土坑5基の遺構調査と遺物包含層調査を主体に作業を進めた。
- 下旬 谷裾の遺物包含層調査を主体に作業を進め、25日に発掘器材などの撤収をもって全ての作業を終了した。

開ケ丘狐谷Ⅱ遺跡（平成14年11月11日～同年12月25日）

- 11月中旬 草刈り後、調査区にテーピングを行い、東側から表土除去を開始した。調査対象区は畑地で遺構確認面までの厚さは20～30cmである。遺物包含層は存在せず、表土層直下が遺構確認面である。表土除去と並行して遺構確認作業を行い、縄文時代中期の竪穴住居跡4軒、土坑21基、立石1基を確認した。
- 下旬 市教育委員会で半分調査済みであるS101の記録保存方法について協議を行った。また、調査区内に基準杭設定及び水準移動を行い、SK01～SK03・S101～S103の遺構調査から開始した。
- 12月上旬 遺構調査を主体に作業を進めた。S102の壁際で環状に配置された柱穴を確認した。また、ほぼ完形の土偶がS104の石組炉直上から出土した。降雪で作業を中断した日もあったが、雪掻きをして作業続行に努めた。
- 中旬 遺構の精査及び実測を主体に作業を進めた。
- 下旬 20日に遺跡全景を空中撮影し、21日から遺跡全体測量を行った。25日に発掘器材などの撤収をもって全ての作業を終了した。

第1章 開ヶ丘中遺跡

第1節 遺跡の立地と概要

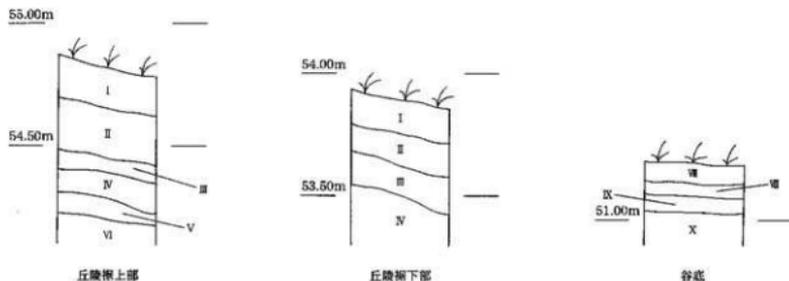
本遺跡は標高68～72mの丘陵と東側に入り込む開析谷から構成される。丘陵頂部と谷底の比高は約20mである。開析谷は幅約50m、谷奥最深部は本遺跡から南東へ100mの地点に在り、現在でもそこから湧水があるという。谷は北北東に開析され、谷奥から500mの戸隠神社付近で境野新扇状地へと変わる。

前年度の調査で、丘陵東側中位の平坦部に占地する奈良時代から平安時代前期にかけての集落が確認された。平坦部は標高56～61m、地形勾配5～10°、長さ110m・幅20～25mの細長い形状で尾根筋に並行する。集落は礎石建物1棟、掘立柱建物10棟、竪穴住居31棟、土師器窯2基、土坑122基、溝5条で構成され、8世紀半ばから9世紀後半にかけて形成されている。

今回、対象になった調査区域は平坦部の東側に隣接する丘陵裾部で、平坦部との比高は約6mである。調査区中央部の埋没小支谷と丘陵裾部全域で、奈良・平安時代の遺物包含層が確認された。包含層中から収納箱20箱分の遺物が採集され、第11図に掲載したグリッド別遺物分布状況は、平坦部に占地する遺構分布状況と大旨一致する。また、今回の調査で確認された5基の土坑は出土遺物からいずれも奈良・平安時代に帰属し、前年度確認された集落の端部にあたる遺構と考える。

今回調査した丘陵斜面裾の上部と下部及び谷底の基本堆積土層をもとに図示した。作図は調査区北端で行った。I層〔極暗褐色土〕は丘陵斜面一帯に堆積が観察される現表土である。II層〔褐色土〕は斜面上部にみられる。III層〔黒褐色土〕とIV層〔暗褐色土〕も丘陵斜面一帯に堆積が観察され、III層は奈良・平安時代の遺物を包含する。V層〔褐色土〕はローム漸移層で斜面上部にみられる。VI層〔明黄褐色土〕はロームで丘陵斜面一帯に堆積が観察される。VII層は谷底の表土であるが、常時水流にさらされている。VIII層〔極暗褐色土〕は谷底一帯に堆積が観察され、奈良・平安時代の遺物を多量に包含する。IX層〔極暗褐色土〕も谷底一帯に堆積が観察され、拳大から人頭大の円礫を多量に含む。円礫の隙間に奈良・平安時代の遺物を包含する。X層は細かい円礫を主体とし、遺物の包含は観察されない。

土坑の掘り込みは丘陵斜面裾上部のIV層〔暗褐色土〕上面で確認した。



第5図 基本堆積土層 (1:20)

第2節 検出された遺構と遺物

平安時代に帰属する5基の土坑と遺物包含層が確認された。遺物包含層は調査区中央部の埋没小支谷と丘陵裾部全域に広がり、奈良・平安時代の須臾器、土師器、土鉢、瓦塔片が収納箱20箱分採集された。

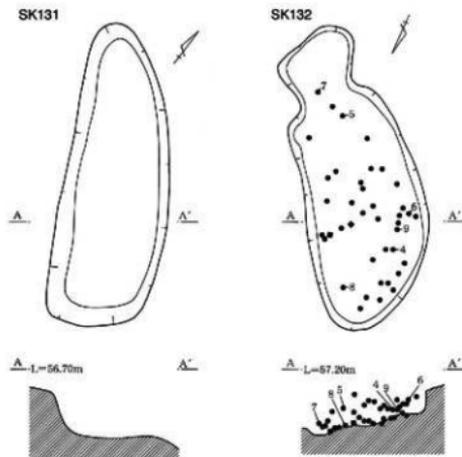
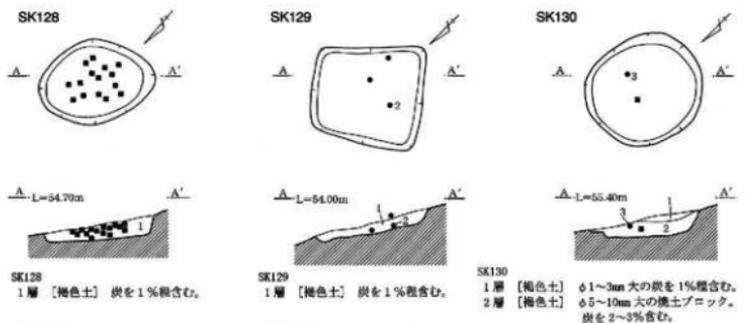
1. 土坑 (第6図、図版2)

SK128

調査区北西端の緩斜面に立地する。平面形は円形、規模は長軸96cm、短軸70cm、深さ22cmである。被熱痕のある拳大の礫が多く出土した。

SK129

調査区北西端の緩斜面に立地する。平面形は方形、規模は長軸90cm、短軸80cm、深さ26cm、長軸方位 $N-49^{\circ}-E$ である。土師器甕、瓦塔が底面から出土した。



第6図 SK128~132

0 (1:40) 2m

SK130

調査区北西端の緩斜面に立地する。平面形は円形、規模は長軸99cm、短軸92cm、深さ22cmである。壁面が被熱を受けており、焼壁土坑とみられる。土師器甕、土鍾(3)が出土した。

SK131

調査区南西側の緩斜面に立地する。平面形は長楕円形、規模は長軸230cm、短軸92cm、深さ36cm、長軸方位N-36°-Wである。遺物は土師器片、須恵器片が少量出土した。

SK132

調査区南西側の緩斜面に立地する。平面形は長楕円形、規模は長軸228cm、短軸100cm、深さ34cm、長軸方位N-44°-Wである。遺物は土師器甕、須恵器甕・杯が多量に出土した。

2. 遺物包含層

遺物包含層は調査区中央部の埋没小支谷と丘陵裾部全域に広がり、奈良・平安時代の須恵器、土師器、土鍾、瓦塔片が収納箱10箱分採集された。今回、対象になった調査区域は、前年度の調査で集落が確認された丘陵中位平坦部の直下である。第11図に掲載したグリッド別遺物分布状況が遺構分布状況と大旨一致するため、遺物包含層は直上の集落からの流入と考える。

3. 出土遺物

土坑出土遺物(第7図、表3、図版3)

SK129

遺物は1の酸化焰焼成の土製品と2の土師器甕が出土している。1は表面が摩耗しているが瓦塔の斗供部のような形をしている。その他に須恵器杯・蓋の小片、土師器の甕の小片が出土している。

SK132

遺物は須恵器杯A・杯B蓋・水瓶・甕、土師器の甕・鍋の破片が出土している。4・5の須恵器杯Aは底部回転切り差し後未調整で、わずかに押さえが入る。6の杯Bを含めて9世紀前半頃のものである。8の仏鉢は体部にカキ目、下半部にはヘラナダが入る生焼けの焼成不良品である。

包含層出土遺物(第7～10図、表3、図版3～6・18)

包含層から出土した遺物は、須恵器と土師器を主体とした土器類と土製品で総破片点数3,450点余りである。器種別では、須恵器杯B・杯B蓋・杯A・稜碗・甕・長頸瓶・水瓶・広口瓶・小瓶・横瓶・短頸壺・鉄鉢・馬形土製品、土師器の碗・甕・鍋と内黒の高台付碗、土製品の瓦塔・土鍾が出土している。大別すると須恵器は貯蔵具の壺・甕類と食器の杯類、土師器は調理具の甕・鍋に分かれる。その他に仏教関連の特殊遺物がある。

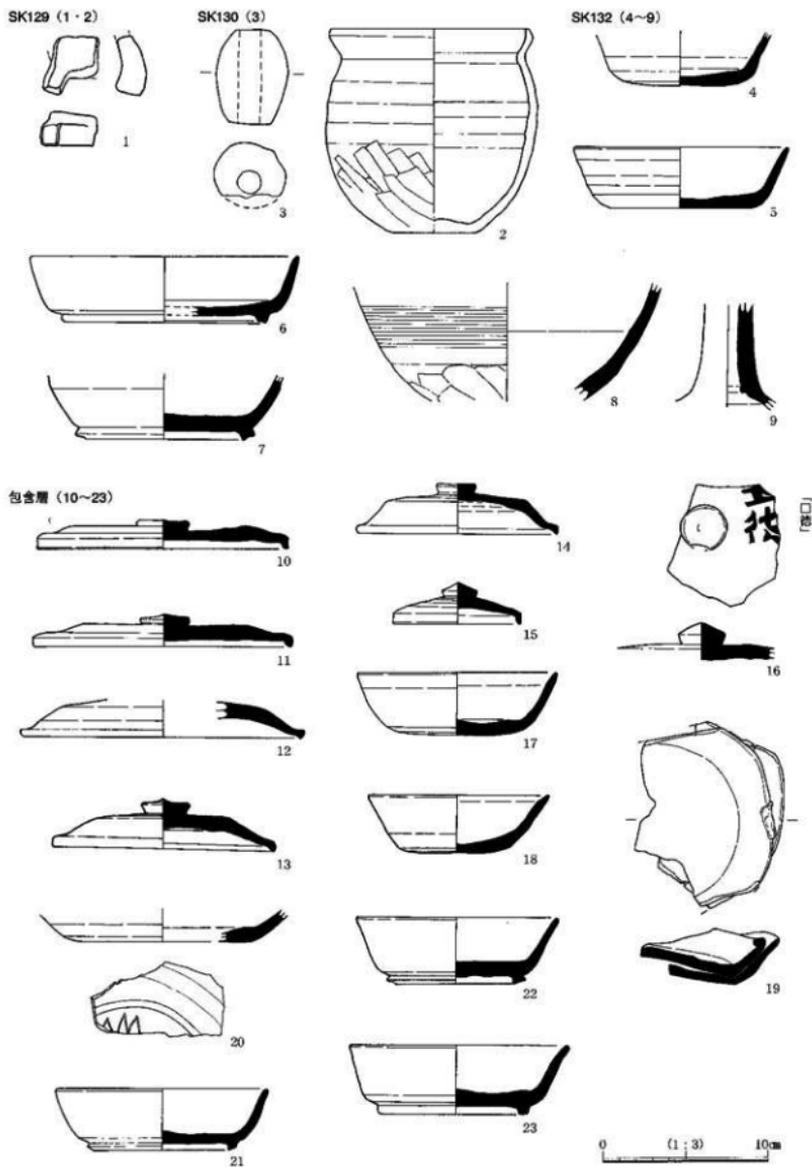
これらの遺物は、調査地区のほぼ全体から出土しているが、数量的には中央部のX580、Y-120グリッドと南部のX550、Y-100グリッドの2箇所分布の中心がある。全体的に中央部グリッドの出土数量は南部グリッドよりも多い。中央部で最も出土数の多いX580、Y-120グリッドでは、罽書土器・杯蓋碗・土師器碗・土師器内黒高台碗・大型の壺や鉢、それ以外に仏教関連遺物の稜碗や鉄鉢が出土している。X580、Y-120グリッドの東側に連続するX580、Y-110グリッドでも罽書土器、稜碗や鉄鉢、杯蓋碗、馬形土製品が出土している。

南部のX550、Y-100グリッドでは、貯蔵具・調理具・食器類以外に稜碗や鉄鉢が見られる。

以下に器種ごとに出土遺物の概要を記す。

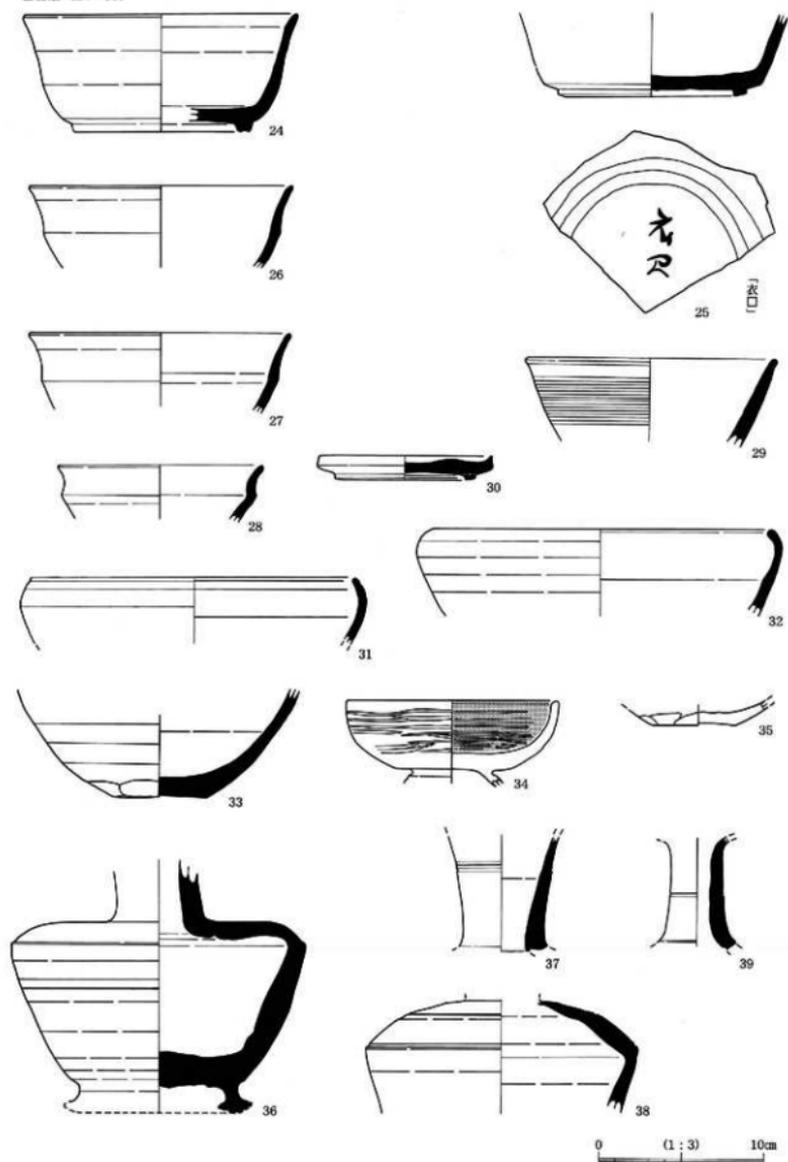
須恵器杯・鉢類

須恵器杯類は、須恵器杯A・杯B・杯B蓋が出土している。17の杯Aは8世紀後半頃のものの、18



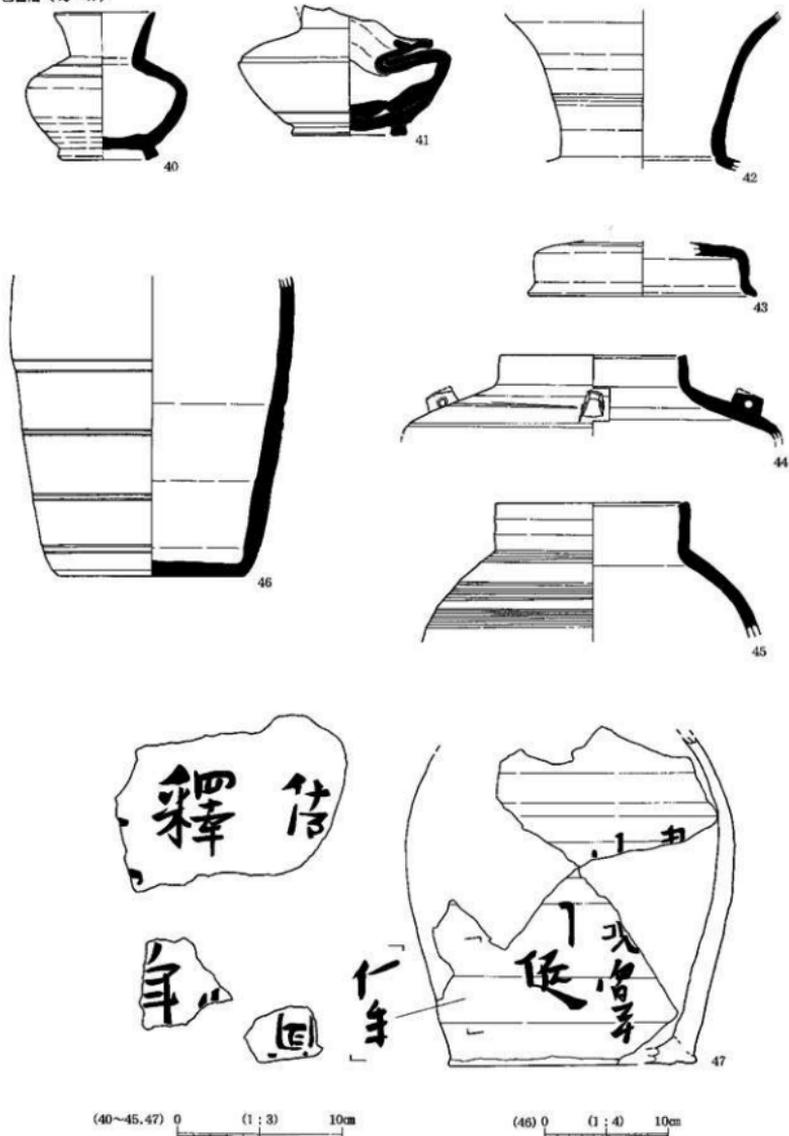
第7図 SK129・130・132、包含層出土遺物(1)

包含層 (24~39)



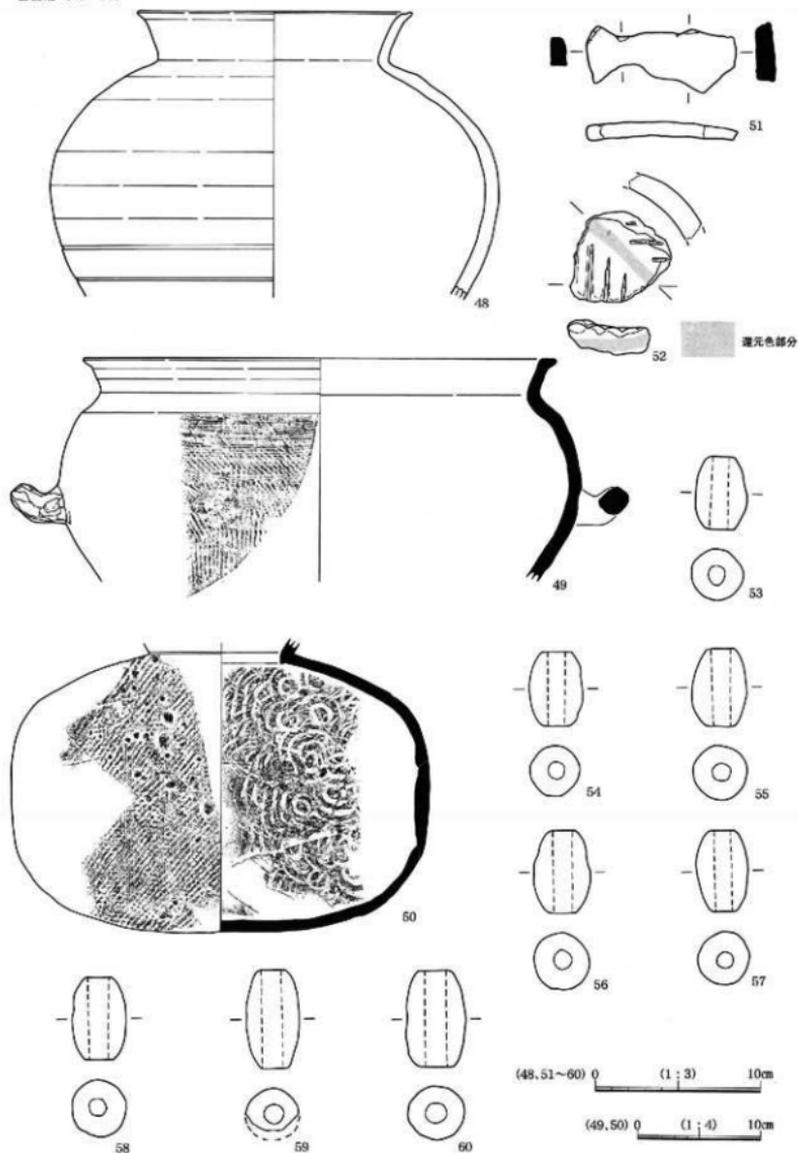
第8図 包含層出土遺物(2)

包含層 (40~47)



第9圖 包含層出土遺物(3)

包含層 (48-60)



第10圖 包含層出土遺物(4)

表3 関ヶ丘中遺跡 出土遺物観察表

回収 番号	出土遺構 出土地点	出土 層位	種別	器種	大きさ			胎土(土製品は重量)	色調	備考
					口径	底径	器高			
1	SK129	底面	土製品	丸形(片断あり)	—	—	—	灰色磁物粒小粒	浅黄橙	
2	SK129	底面	十餘粒	葉	12.3	—	12.4	白・灰色磁物粒	にぶい橙	
3	SK130	底面	土製品	十餘	径3.3	径6.0	孔径1.2	H立つ磁物粒なし	浅黄橙	
4	SK132	底面	須恵器	杯A	—	5.4	—	目立つ磁物粒なし	灰白	生焼付
5	SK132	底面	須恵器	杯A	12.0	8.4	3.7	白・灰色磁物粒	灰白	
6	SK132	底面	須恵器	杯B	16.3	11.9	3.9	黒色磁物少量	浅黄橙	
7	SK132	底面	須恵器	杯B	—	9.2	—	灰色小粒少量	灰白	
8	SK132	底面	須恵器	鉄片	—	—	—	白色小粒少量	灰白	生焼付
9	SK132	底面	須恵器	水瓶	—	—	—	目立つ磁物粒なし	灰白	
10	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	蓋	15.2	—	1.8	透明磁物少量	灰	杯蓋類
11	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	杯B蓋	15.3	—	2.0	灰色小粒極少量	灰	
12	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	蓋	16.7	—	—	目立つ磁物粒なし	粗黄灰	杯蓋類
13	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	蓋	13.5	—	3.0	黒色粒少量	灰白	
14	X600_Y-140	Ⅲ	須恵器	蓋	12.1	—	3.2	灰石粒少量	灰白	
15	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	短須恵	7.7	—	—	白色磁物少量	灰	
16	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	蓋	—	—	—	白色小粒少量	灰白	
17	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	杯A	12.0	7.8	3.7	白色小粒少量	灰白	
18	X580_Y-130	Ⅲ	須恵器	杯A	10.9	5.6	3.5	白色岩片大塊	粗黄灰	
19	X590_Y-130	Ⅲ	須恵器	杯A	—	—	—	白色小粒少量	青灰	磨面資料
20	X570_Y-110	Ⅲ	須恵器	杯Aか	—	(10.6)	—	白色磁物	灰白	底部能指類
21	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	杯A	12.8	9.0	—	灰石粒	灰	
22	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	杯B	12.3	8.6	4.0	灰石粒・磁物少量	にぶい橙	生焼付
23	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	杯B	12.9	9.0	4.2	白色磁物少量	にぶい橙	
24	X570_Y-120	Ⅲ	須恵器	碗	(16.6)	10.6	7.2	白色磁物少量、灰気あり	灰白	
25	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	杯B	—	10.1	—	白色磁物粒	青灰	皿蓋「表口」
26	X350_Y-100	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	(8.0)	—	—	白色磁物粒	灰白	
27	X550_Y-100	Ⅲ	須恵器	鐵碗	(15.5)	—	—	白色磁物少量	灰	
28	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	(12.4)	—	—	精良	明オリーブ灰	
29	X540_Y-100	Ⅲ	須恵器	碗	13.2	—	—	黒色小粒	灰白	
30	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	托	—	(14.0)	1.5	白色磁物	灰	
31	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	(19.6)	—	—	白色磁物粒	灰	生焼付
32	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	(21.2)	—	—	黒色粒	灰白	
33	X540_Y-100	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	—	5.6	—	灰石砂粒やや目立つ	灰	
34	X580_Y-120	Ⅲ	内須土器	碗	12.8	—	—	石灰灰石砂粒	灰白	
35	X580_Y-120	Ⅲ	上須器	碗	—	4.8	—	石灰砂粒	浅黄橙	
36	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	蓋	—	(11.2)	—	白色磁物・精良	灰	
37	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	長須瓶	—	—	—	白色小粒少量	オリーブ灰	
38	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	蓋	—	—	—	白色	灰	
39	X550_Y-120	Ⅲ	須恵器	小瓶	—	—	—	白色磁物極少量	灰	
40	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	小形碗	6.1	6.0	9.0	白色磁物少量	明オリーブ灰	
41	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	碗	—	6.7	—	白色小粒少量	灰	底ヘタリ
42	X550_Y-100	Ⅲ	須恵器	広口甕	—	—	—	白色磁物極少量	灰白	
43	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	短須瓶蓋	(14.3)	—	—	白色小粒少量	灰	
44	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	短須瓶	(11.1)	—	—	白色磁物極少量	灰	
45	X580_Y-110	Ⅲ	須恵器	短須瓶	(11.6)	—	—	白色小粒少量	灰色	
46	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	蓋	—	15.0	—	目立つ磁物粒なし	灰白	
47	X580_Y-120	Ⅲ	土器	土器	—	(14.8)	—	半透明磁物粒	にぶい橙	磨面品、長文瓦葺
48	X580_Y-120	Ⅲ	十餘粒	葉	(16.6)	—	—	半透明磁物粒少量	にぶい橙	
49	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	把平付蓋	(38.4)	—	—	白色・灰色岩片	灰	
50	X580_Y-120	Ⅲ	須恵器	鉄鉢	—	—	—	白色磁物少量	灰	
51	X580_Y-110	Ⅲ	土製品	馬形土製品	—	—	—	白色磁物少量	灰	須恵器蓋類
52	X530_Y-110	Ⅲ	土製品	瓦葺(磨面部)	—	—	—	白色小粒少量	灰白	
53	X580_Y-120	Ⅲ	土製品	土罐	径3.1	径4.4	孔径0.9~1.1	白色小粒、(59.50g)	灰白	
54	X500_Y-130	Ⅲ	土製品	土罐	径3.1	径4.5	孔径1.0~1.1	白色磁物、(56.32g)	灰白	
35	X580_Y-120	Ⅲ	土製品	土罐	径3.4	径4.7	孔径1.0~1.1	磁物中量、(44.33g)	浅黄橙	
56	X590_Y-120	Ⅲ	土製品	土罐	径3.4	径5.0	孔径1.1	半透明磁物粒、(48.24g)	灰白	
57	X580_Y-110	Ⅲ	土製品	土罐	径3.1	径4.9	孔径1.0	透明・半透明磁物粒、(44.35g)	浅黄橙	
58	X580_Y-120	Ⅲ	土製品	土罐	径3.3	径5.0	孔径1.1~1.3	半透明磁物粒、(47.96g)	灰白	
59	X580_Y-130	Ⅲ	土製品	土罐	径—	径—	孔径—	灰色岩片磁物少量	浅黄橙	
60	X580_Y-110	Ⅲ	土製品	土罐	径3.6	径5.8	孔径1.3	半透明磁物粒、(59.61g)	橙	

の杯 A は 9 世紀後半のものである。X590, Y-130 グリッドでは、杯 A が 2 点重ね焼きのまま融着した状態の資料が見られる。20 の杯の底部には線刻で蓮弁状の文様が描かれている。

杯 B は、8 世紀後半頃から 9 世紀前半頃のものが出土している。25 の杯 B の底部には墨書文字「衣□」が書かれている。

杯 B 蓋は、10・11 のような 8 世紀後半頃のものとは 13・14 の 9 世紀前半から中頃のものが出土している。蓋では 15 のような小型の短頸壺の蓋も出土している。16 の杯 B 蓋の天井部には墨書文字「□徳」が書かれている。

仏教関係では、稜椀・鉄鉢が出土している。稜椀は 26・27 のようなやや大振りなものと、28 のような小振りなものが出土している。

鉄鉢は 31・32・33 が出土しており、33 は平底である。29 の小型の鉢あるいは椀は、体部外面にカキ目が入っている。その他に鉄鉢か椀に組み合うと推測される 30 の托のようなものが出土している。低い高台が付き、口縁端部は蓋のような折り返しが上方に向かってなされている。器面に残る焼成痕は、灰が上方から被り、窯内での焼成が高台を下にした状態であることがわかる。また、他の土器との重ね焼き痕は見られない。端部の形態的特徴から蓋の可能性もある。

土師器碗・黒色土器

土師器の碗・内黒土器は土師器の甕・鍋と比べて極端に数が少ない。土師器碗は図示した 35 の 1 点のみが出土している。内黒土器は 34 の高台の付いた碗が 1 点出土している。内面黒色処理を施し丁寧な横方向の磨きが入っている。

須恵器壺・瓶類

須恵器の瓶類は長頸瓶・水瓶・広口瓶・小瓶・横瓶が出土している。36 の長頸瓶は緑色の自然釉がよく掛かっているが、焼き膨れが目立つ。37・38 の長頸瓶は 8 世紀後半頃のもの、40・41 の小瓶は、8 世紀後半から 9 世紀前半頃のものである。41 の須恵器小瓶は窯内で焼けてへたった状態であり、生産窯付近で廃棄されたものであろうか。

壺類では 44・45 の短頸壺が出土している。44 は肩部に台形の耳が付いている。破片であるが、他の出土例から四方向に耳がついていたものと考えられる。肩部には蓋を被せて焼成した痕跡が見られる。43 は短頸壺の蓋である。46 の須恵器壺は大型の壺形である。

甕はほとんどが胴部の破片ばかりである。48 の須恵器の甕は短胴広口で環状の取っ手が付いており、鉢形を大きくしたような形態である。

土師器壺・その他

47 の土師質の壺は、底部回転糸切り難し調整で体部はロクロ調整、酸化焙焼成である。体部に 16 文字以上の墨書文字が書かれている。文字は「甕」「僧」と判読できる。48 の土師器甕もロクロ調整で酸化焙焼成である。口縁部の作りは短頸壺にくらべ長頸で外反している。その他に破片で土師器の甕・鍋の体部片が大量に出土している。

土製品

土製品は瓦塔、馬形土製品、土鉢が出土している。瓦塔は包含層から 1 点が出土している。52 の瓦塔は屋蓋部で表の面に屋根瓦の表現が見られ、裏面に地垂木の表現は見られない。全体に酸化焙焼成であるが、破断面には還元色が見られる。

土鉢は全部で 16 点出土している。大きさは長さが 4.5cm、5.0cm、6.0cm 大の 3 種類に分かれる。

馬形土製品は、須恵器の蓋を切り取り加工したもので、形状から馬形と判断した。

第3節 まとめ

平成13年度調査区

開ケ丘中遺跡は、開ケ丘丘陵内の標高59～61mの傾斜地に立地している。傾斜地途中の平坦部から礎石建物（1棟）、掘立柱建物（10棟）、竪穴住居（31軒）、土坑（73基）、溝（11条）、土器焼成遺構等が検出されている。出土遺物は須恵器の鉄鉢・稜碗・水瓶・多口瓶、瓦塔、陶製丸輪など仏教的色彩の強いものや、須恵器の容器蓋、赤彩土師器の大型高杯など特殊な製品、漆紙、焼成不良須恵器等の生産関連遺物が出土している。

本年度調査区

本年度調査地区は、平成13年度調査した傾斜地平坦部の集落遺構群から4～12m程東に下った斜面地にある。遺構は5基の土坑が遺構群の端部で見られ、その他は斜面から谷部にかけての土器廃棄遺構（谷）からなる。

調査地区の大半は傾斜した遺物包含層となっており、包含層の最下層Ⅲ層から集落で出土したものと同様な遺物が大量に出土している。

第13図は集落跡から出土している土器の時期と斜面包含層から出土している土器の時期を杯類と比較したものである。包含層遺物に8世紀前半の資料がほとんど見られない点に違いがあるが、基本的にどちらも8世紀後半から9世紀前半代の遺物が主体となっている。よって、ほとんどの遺物は斜面上位にある掘立柱建物跡を主体とする遺構群から廃棄されたものと考えられる。

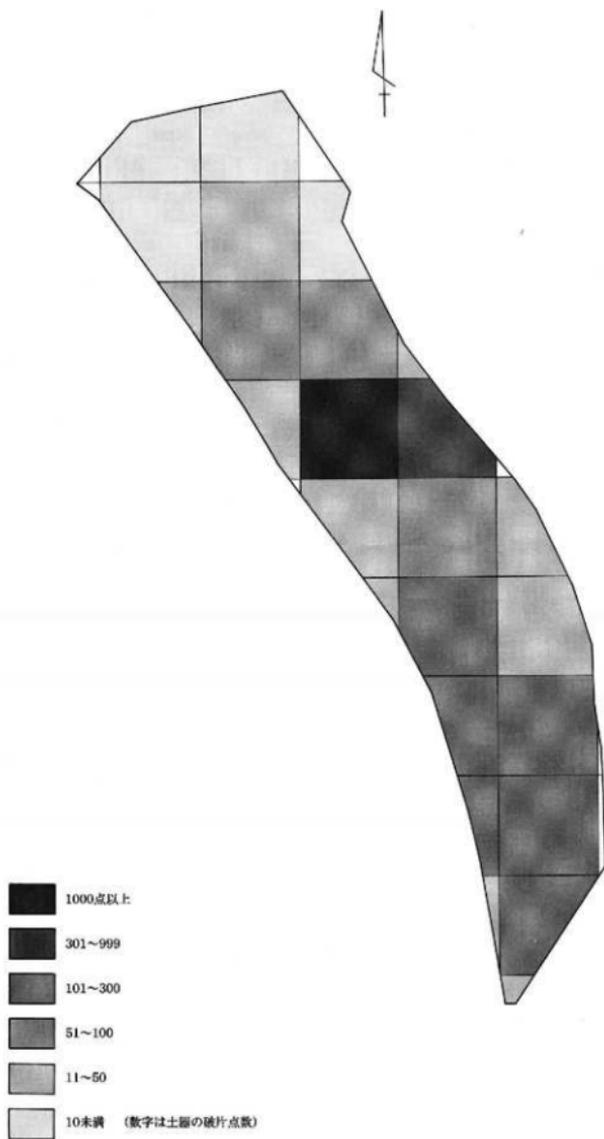
出土遺物のグリッドごとの数量分布状況図（第11図）によると、中央部やや北寄りのグリッドに最も出土量の多い地区があること、仏教関連・祭祀関連の特殊な遺物の多いことが読みとれる。第12図の器種別の分布図からは、中央部北寄りのグリッド付近において、須恵器の貯蔵具に対する須恵器の食器と土師器調理具の比率が多いことがわかる。おそらくこれらは集落遺跡の北半部と南半部から廃棄される土器の内容に差があったためと考えられる。廃棄された出土遺物の内容から見て、北半部の斜面上にある遺構、なかでも大型の掘立柱建物跡のSB03を中心とする遺構群は、仏教関連・祭祀関連遺物を使用していた可能性が考えられる。

その他特殊遺物では、瓦塔の破片が出土している。本年度出土のものは摩耗して屋蓋部の丸瓦の表現がやや低くなっているが、厚さや焼成が共通すること、垂木の表現が見られないこと等から昨年度のものと同じタイプと見られる。屋蓋部の破片は調査地区の南部で出土しているが、北部のSK129からも斗供部片のような破片が出土している。

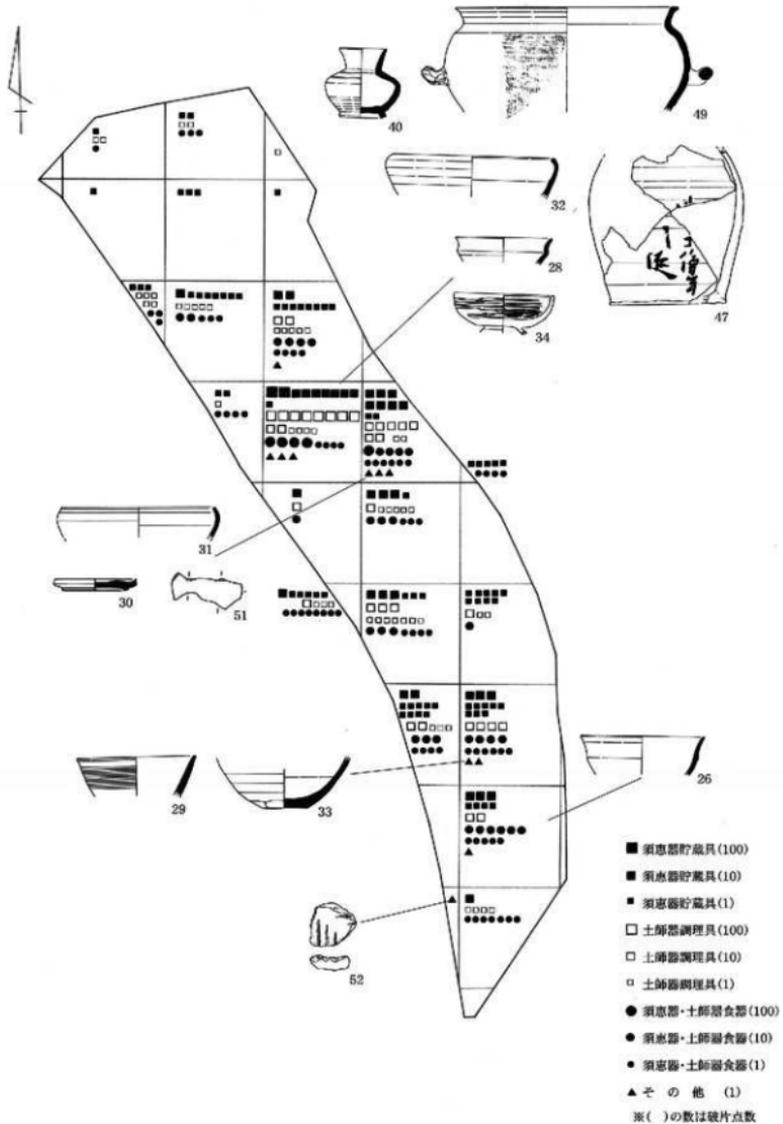
仏教関連遺物では鉄鉢や稜碗が出土しており、昨年度と共通している。また、集落跡では杯蓋覆が出土していたものの黒青土器は見られなかった。今回、墨書土器は包含層から2点出土しており、須恵器蓋には「□徳」、須恵器杯Bには「衣□」が判読できた。

なお、酸化焰焼成で底部回転糸切り痕を残す壺には「釋」「僧」以下16文字以上の判読不明の長文を記している。（図版18赤外線写真）この壺は近世に帰属する骨磁器と思われる。

以上平成13年度の調査で明らかになった礎石建物や掘立柱建物を主体とした遺跡の中心部に対して、今回の調査では周辺の斜面地や谷部に、祭祀・仏教関連の遺物が廃棄されていたことが明らかになり、出土遺物に仏教的な色彩を持つ本遺跡の性格がより鮮明になった。今回の調査成果は周辺部を含めたこの地区全体の性格解明に繋がるものと思われる。



第11図 包含層出土遺物の数量分布図



第12図 包含層出土遺物の種類別分布図

時期	集落跡出土遺物 (2002年 富山市教委より)	斜面部包含層出土遺物 (本報告書より)
8世紀前半	<p>SI4-7, SK19-138, SI20-51, SI27-82, SI16-40</p>	
8世紀後半	<p>SI20-50, SI16-41, SI19-39, SI27-63, SI27-86, SI8-21, SK59-164, SI21-55, K55-166, SK59-167</p>	<p>包-10, 包-11, 包-17, 包-21</p>
9世紀前半	<p>SI21-64, SI21-66, SI21-67, SI16-41, SI16-42, SI16-43, SI31-90, SK31-92, SI19-48</p>	<p>包-15, SK132-6, SK132-7, SK132-8, 包-23, 包-14</p>
9世紀後半	<p>SI19-47, SI23-64, SI12-30</p>	<p>包-18</p>

第13図 集落跡と包含層出土遺物の時期的な比較

第2章 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

第1節 遺跡の立地と概要

本遺跡は標高56～59mの丘陵平坦部に立地する。東側崖下の境界新扇状地との比高は約20mである。調査前は畑地として利用されており、厚さ30～40cmの耕作土である表土を除去すると、その直下は明黄褐色ロームとなる。そのため、遺物包含層は存在せず、遺構確認面も表土層直下となる。

検出された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡が4棟、土坑が21基である。本遺跡北側の丘陵先端部でも同時期の遺構が多数確認されており、当該期の集落が丘陵平坦部に大きく広がるものと考えられる。なお、SI01については、二つの調査区にまたがって検出されているため、これについては、別途、報告書〔市教委2003a〕において報告する。

第2節 検出された遺構と遺物

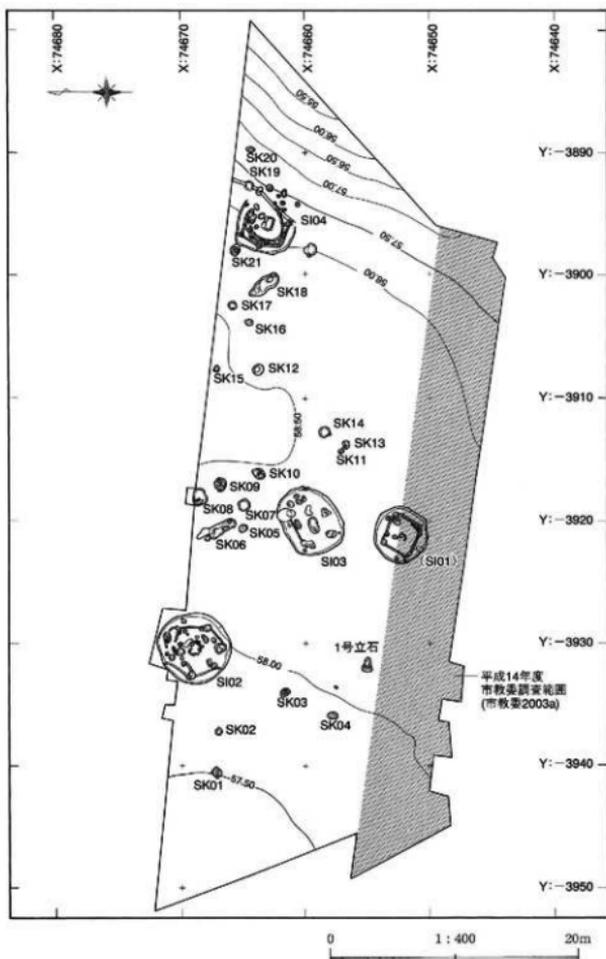
1. 竪穴住居跡

SI02 (第15・16河、図版8)

調査区北西側のX670・680、Y-930・940区から検出されている。丘陵頂部の平坦地上に位置するもので、平面形状は円形を呈する。規模は長軸5.60m、短軸5.10m、壁高0.18～0.38mで、床面積は23.7m²である。住居内の施設として、西側の壁際に地山を掘り残してつくった低い棚状の段がある。規模は全長5.40m、上幅0.20～0.52m、床面からの高さ0.07～0.11mである。同施設の上面には、特に硬化や磨耗した状況はみとめられない。柱穴は、壁際に並ぶP1～7の7基、もしくは六角形状に並ぶP1～5・8の6基が該当するものと思われる。各柱穴の間には、部分的ながら細く浅い溝が延びる。溝の上幅は0.07～0.16m、深さは0.06～0.07mである。また、これらの内側には、やや規模の小さいピットが6基(P9～14)六角形状に並んでおり、本跡が拡張されている可能性が考えられる。炉は、住居中央から右側炉が検出されている。平面形状は長方形と思われるが、石列が崩れており判断としない。規模は長軸1.05m、短軸0.66mで、長軸方位は約N-47°-Wを示す。

遺物は、中期中葉を主体とする土器片(総重量12.62kg)のほか、耳栓1点、磨製石斧5点、石錘1点、自然石170点(総重量54.17kg)が出土している。いずれも覆土下層から床面付近にかけて検出されている。遺物の出土状況は、棚状の施設の上を含む壁際に多く、床面中央付近では少ない。また、この内、磨製石斧は、棚状の施設の上とその対面の壁寄りに2～3個ずつまとまって出土している。

1～9は深鉢と思われる。1～3・6は半隆起線によって主な文様が描出されるものである。1は口唇部が角頭状に肥厚するもので、口唇部とその直下にはヘラ状工具による刻み目が施される。口縁部には平行沈線化した半隆起線が3条めぐり、そこから一部、「U」字状に短く垂下するのがみえる。2は口縁部に半隆起線とヘラ状工具による刻み目が施された隆線によって小さな渦巻状の文様が描かれる。3は口縁部に半隆起線が3条と、その間に波杉状の刻み目が施された隆線が1条めぐっている。4・5は系統の異なる土器と思われる。4はキャリパー形の器形を呈するものである。口縁部は単節縄文を地文とし、そこに斜めに延びて先端が小さな渦巻きとなる隆線が施される。隆線の両側には沈線が沿い、隆線の背は沈線によって二分する手法をとる。口唇部にも同様の手法で沈線が2条めぐり、5は把手部に緩い渦巻状の貼付文が付されるものである。把手部上端は欠損する。貼付文の背は沈線により二分される。10は耳栓である。片端が大きく広がる鼓形を呈するもので、貫通孔は有さない。



第14図 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡全体図 (1:400)

赤彩痕がみとめられる。高さ3.0cm、最大径2.8cm以上。11～15は定角式の磨製石斧である。この内、12・13は完形品、ほか3点は折損品である。刃縁が確認できる12・13・15は偏刃を呈する。いずれも蛇紋岩製。16は礫石鏃である。扁平な楕円鏃を素材とし、長軸の両端に打ち欠きによる凹部をつくる。凹部にはわずかに磨耗痕がみられる。石英斑岩製。

S103 (第17図、図版9)

調査区中央のX660・670、Y-920・930区から検出されている。丘陵頂部の平坦地上に位置するもので、平面形状は円形を呈する。規模は長軸5.40m、短軸4.14m、壁高0.20～0.35mで、床面積は24.3m²である。柱穴は、五角形状に並ぶP1～5の5基が該当するものと思われる。また、南西側へわずかにずれてP6～10の5基がほぼ同じ位置から検出されていることから、建て替えが行われているものと考えられる。P3とP11の間には、部分的に細く浅い溝が直線的に延びる。溝の上幅は0.05～0.06m、深さは0.04mである。炉は、住居中央やや南西寄りから地床が検出されている。平面形状は長楕円形を呈し、断面形は浅い皿状となる。規模は長軸1.32m、短軸0.70mで、長軸方位はN-72°-Eを示す。

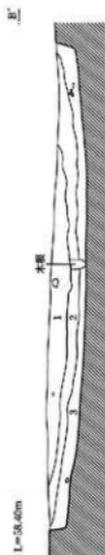
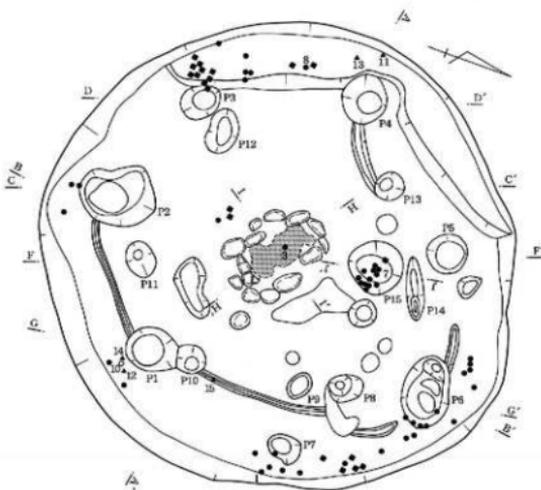
遺物は、中期中葉を主体とする土器片(総重量56.12kg)のほか、打製石斧1点、磨製石斧4点、磨石2点、門石2点、石皿1点、自然石215点(総重量24.55kg)が出土している。いずれも覆土下層から床面付近にかけて検出されている。遺物は、東壁際から床面中央付近にかけて出土している。

17・20～29・31～39は深鉢と思われる。17・20～29・31～32は半隆起線によって主な文様が描かれるものである。17は平行沈線化した3条一単位の半隆起線によって文様が描かれる。口縁部には半円形状の文様が横位に並び、胴部には斜めに垂下して先端が緩い渦巻状となる文様がみえる。文様の隙間には、同じく半截竹管状工具を用いた縦位多条の細線が粗く充填される。20の口唇部直下にはヘラ状工具による細かな刻み目、21には爪形文が施される。また、22の隆線には爪形文、24と25の隆線にはヘラ状工具による細かな刻み目が施されている。39は小形品である。胴部には半隆起線が縦位に施される。底径4.2cm。18・19・30は浅鉢と思われるもので、系統の異なる土器と思われる。18は口縁部に小突起が付くもので、口唇部には沈線とヘラ状工具による細かな刻み目が施される。19は口縁部に波形もしくは横位に連続した弧状の文様が施されるもので、沈線により背を二分された隆線によって表現されている。口唇部には沈線とヘラ状工具による細かな刻み目が施される。18・19は胎土及び内面の焼け痕の状況からみて同一個体である可能性が高い。30は口縁部が断面三角形に肥厚するものである。この口縁部の隆帯上には沈線が1条めぐっており、その端部には小さな渦巻文が表現される。40～42は台付鉢の台部である。43は打製石斧と思われる。基部を欠損するもので、全体に風化が著しい。砂岩製。44～47は定角式の磨製石斧である。44・45は基部および刃部の破片である。46・47は小形の磨製石斧で、刃縁は偏刃を呈する。いずれも蛇紋岩製。48・49は磨石である。48は円礫を利用したもので、正表面に磨面をもつ。49は細長い円礫で、片面と稜角の一部を使用している。48は砂岩、49は角礫岩製。50・51は凹石である。ともに正表面中央に凹みをもつ。50は輝石安山岩、51は凝灰岩製。52は石皿である。角礫岩製。

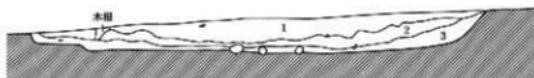
S104 (第18・19図、図版10・11)

調査区中央のX670、Y-900区から検出されている。丘陵頂部の平坦地東側縁辺部に位置するもので、東壁および床面はすでに削平されて遺存しない。平面形状は隅円方形を呈するものと思われる。規模は長軸4.80m以上、短軸4.48m、壁高0.43mである。住居内の施設として、北側の壁際に地山を掘り残してつくった低い棚状の段がある。規模は全長2.80m以上、上幅0.42m、高さ0.15mである。柱穴は、長方形に並ぶP1～3・5～7が該当するものと思われ、これにP4・8が補助的に付加さ

SI02



A L=58.40m



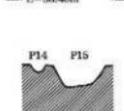
A'

C L=58.40m



C'

J L=58.40m



J'

D L=58.40m



D'

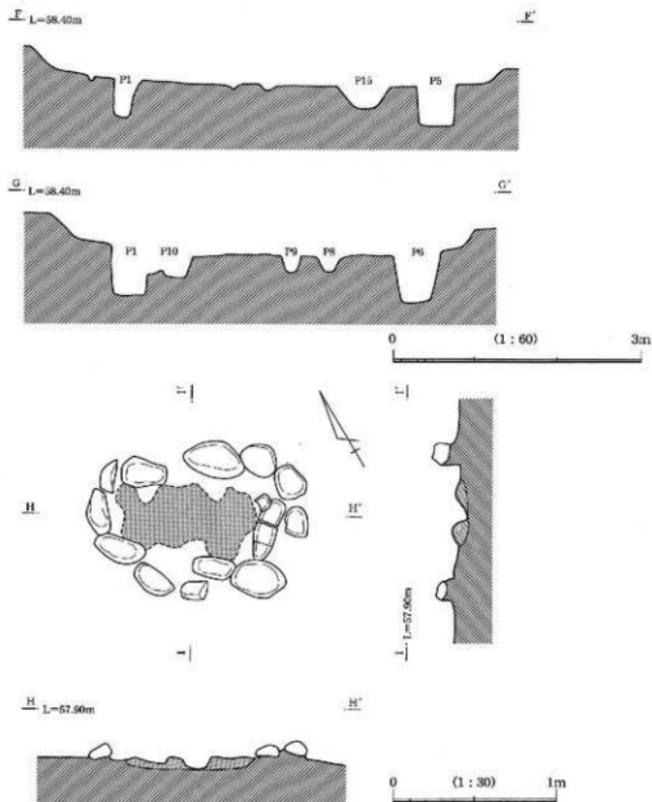
SI02

- 1層 (黒色土) 炭化材 (φ5~10mm) 少量含む。
- 2層 (褐色土) 炭化材 (φ3~5mm) 灰土粒子少量含む。
- 3層 (黄褐色土)
- 4層 (黒色土) 炭化ブロック (φ3~5mm) 焼土粒子少量含む。
- 5層 (黄褐色土)

0 (1:60) 3m

第15図 SI02 (1)

SI02

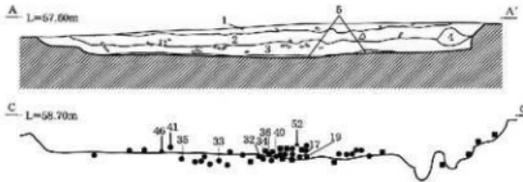
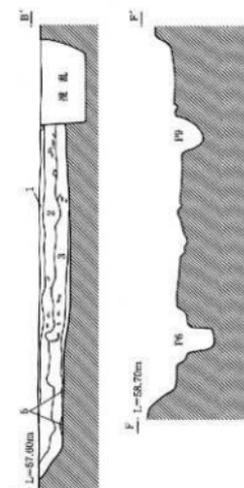
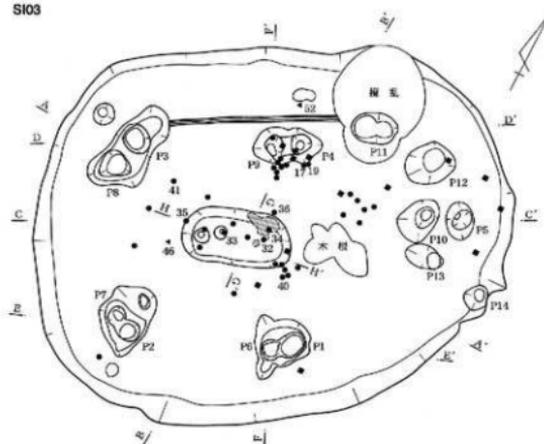


第16図 SI02 (2)

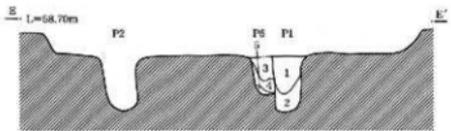
れている可能性がある。また、これらの内側には、複数のピットが検出されており、本跡が拡幅、または建て替えが行われている可能性が考えられる。各柱穴の間には、これを繋ぐように細く浅い溝が延びる。溝の上幅は0.08~0.12m、深さは0.03~0.05mである。炉は、住居中央やや西寄りから石囲炉が検出されている。平面形状は長方形を呈する。規模は長軸0.95m、短軸0.64mで、長軸方位はN-71°-Wを示す。炉床は被熱痕が顕著である。石囲炉内には、色調と混入物が異なる褐色土が堆積しており、人為堆積である可能性が高いと思われる。

遺物は、中期中葉を主体とする土器片(総重量17.35kg)のほか、土偶1点、磨製石斧1点、磨石1点、石皿1点、自然石118点(総重量42.68kg)が出土している。いずれも床面付近から検出されている。この内、土偶については、やや特殊な状況下で検出されている。土偶(65)は、石囲炉内の北西寄り、炉床から約0.13m浮いた位置から、深鉢の大破片(61)の内側を上にして敷き、その上に

SI03

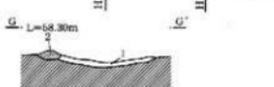
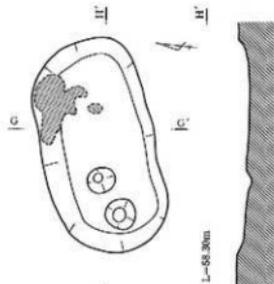


- SI03-P11
- 1層 黒褐色土 炭化ブロック(φ3m)少量含む。
 - 2層 褐色土 盛く崩れる。
 - 3層 暗褐色土
 - 4層 暗褐色土

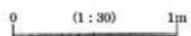


- SI03-P1・6
- 1層 暗褐色土 炭化ブロック(φ3~5m)含む。
 - 2層 暗褐色土 崩れる。
 - 3層 暗褐色土
 - 4層 褐色土
 - 5層 褐色土 2層より硬い。

- SI03
- 1層 褐色土 炭化ブロック(φ3~10m)少量含む。
 - 2層 暗褐色土 炭化ブロック(φ3~10m)少量含む。
 - 3層 暗褐色土 炭化ブロック(φ3~5m)少量含む。
 - 4層 褐色土
 - 5層 褐色土

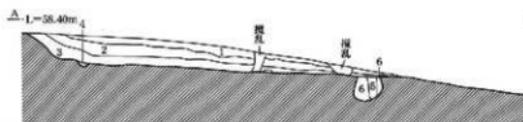
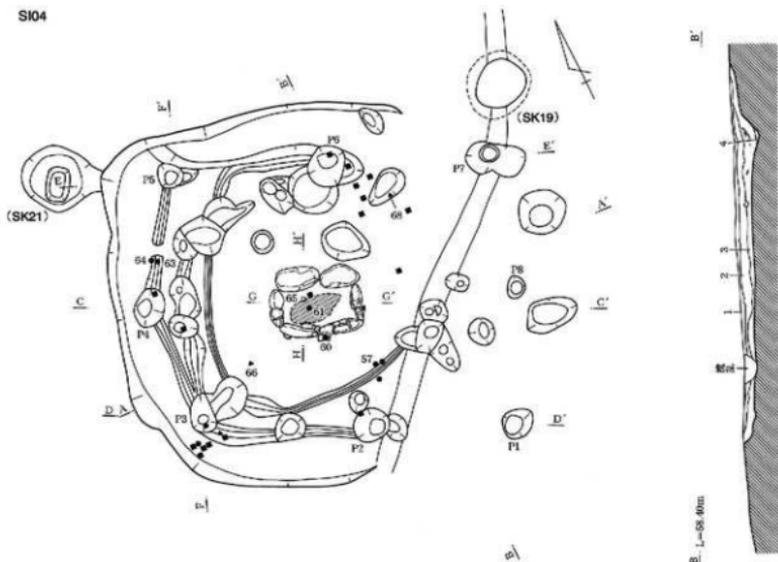


- SI03-P1
- 1層 暗褐色土 焼土ブロック(φ3~10m)炭化ブロック(φ3~10m)多量に含む。
 - 2層 赤褐色土 焼土塊、赤色炭化。

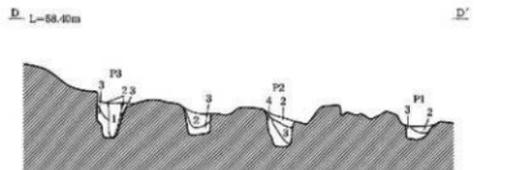
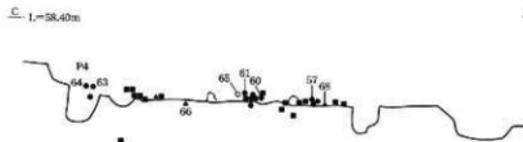


第17図 SI03

SI04



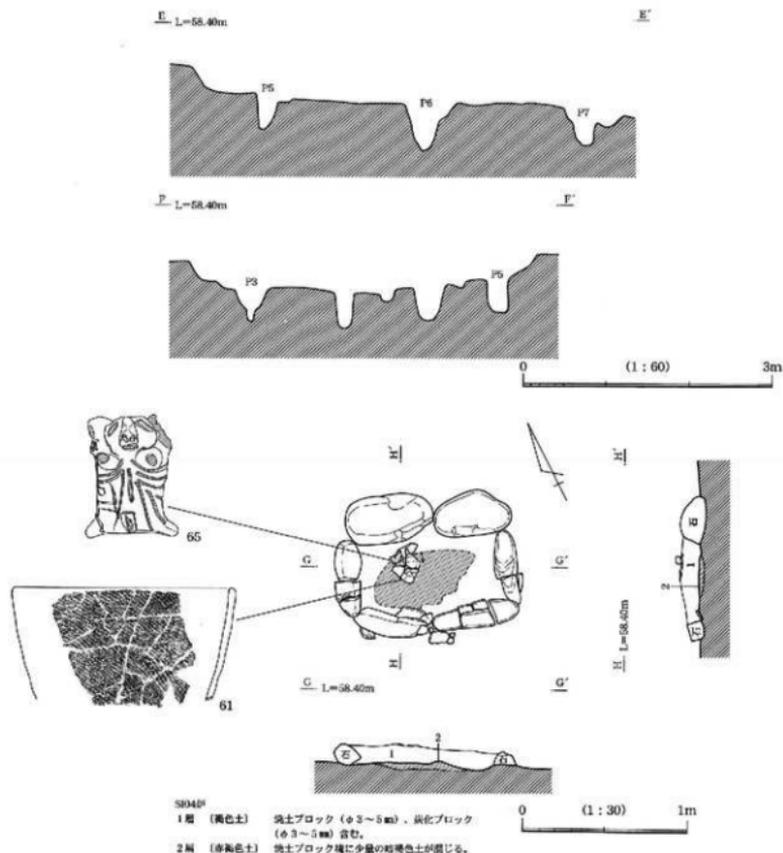
- A'
- SI04
- 1層 (黒色土) 炭化ブロック (φ5~10mm) 少量含む。
 - 2層 (暗褐色土) 炭化ブロック (φ5~10mm) 少量含む。
 - 3層 (暗褐色土) 炭化ブロック (φ5~10mm) 少量含む。
 - 4層 (暗褐色土) 同層。
 - 5層 (黒色土) 柱礎。
 - 6層 (暗褐色土)



- SI04-P1~3
- 1層 (黒色土) 柱礎。
 - 2層 (暗褐色土) 炭化ブロック (φ3~5mm) 含む。
 - 3層 (褐色土) 埴まる。
 - 4層 (褐色土) 埴まる。

0 (1:60) 3m

第18図 SI04 (1)



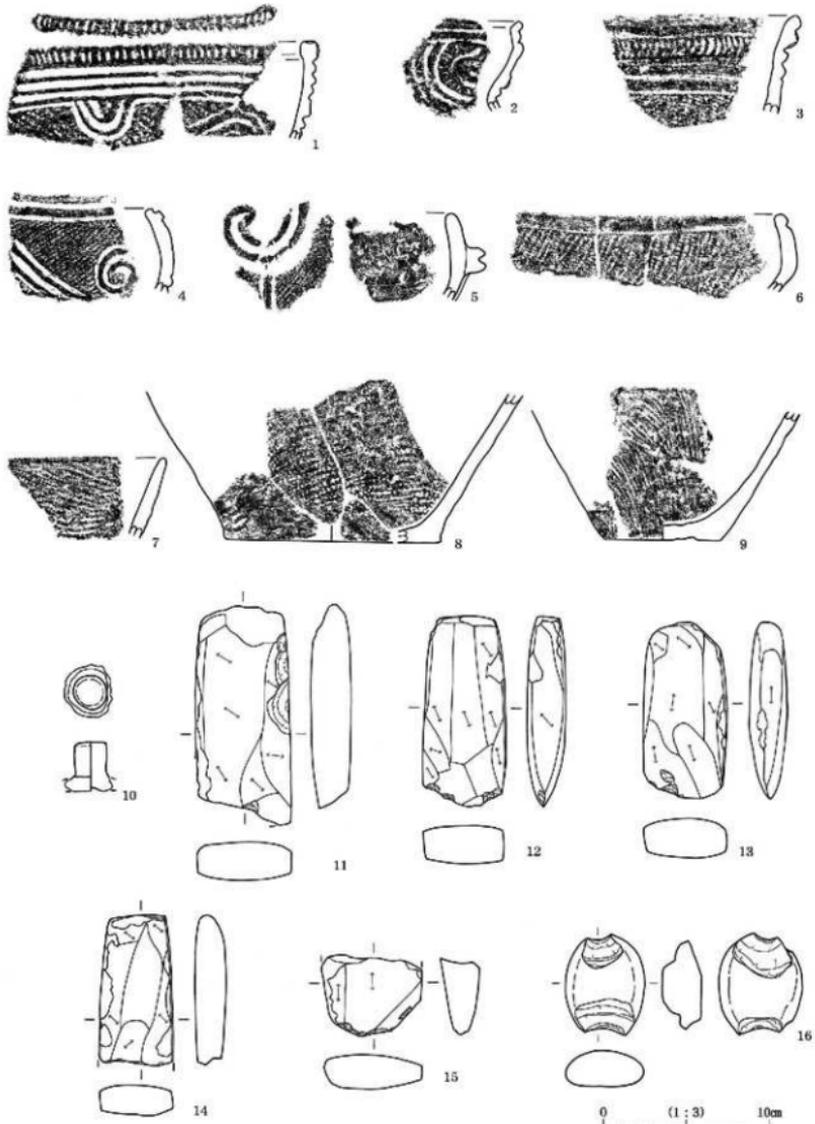
第19図 S104 (2)

仰向けに寝かされたような状況で出土している。

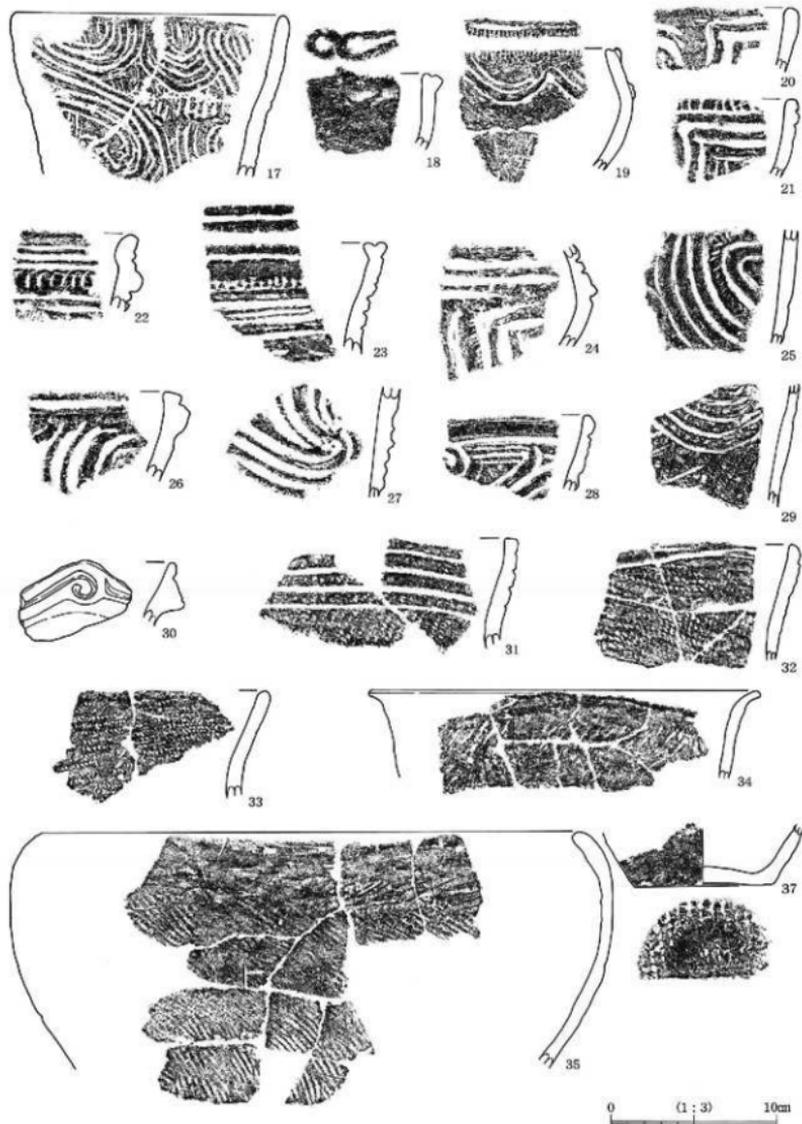
53~62は深鉢と思われる。53~59は半隆起線によって主な文様が描出されるものである。

53・54は口唇部直下に爪形文が施されるもので、53の口唇部には沈線が1条めぐる。56の隆線にはヘラ状工具による刻み目が施される。63・64は浅鉢である。63は無文で、口縁部には焼成後に穿孔された小孔が1箇所確認できる。64は碗状の器形を呈する小形品である。口径14.0cm、器高5.8cm、底径8.5cm。65は中央の土偶である。円柱を前後から潰したような形状で、胴部の延長上に頭と顔を表現している。胴部はわずかに仰け反るように後ろに反る。頭部は額から後頭部にかけて窪ませている。脚部は簡略化され、腰からそのまま足を表現しているようである。胸部には二つの突起がみられ、これが乳房の表現とすれば、腕は付かない。ほぼ完形に近いが、突起した部分を所々欠損する。大きさ

SI02 (1~16)

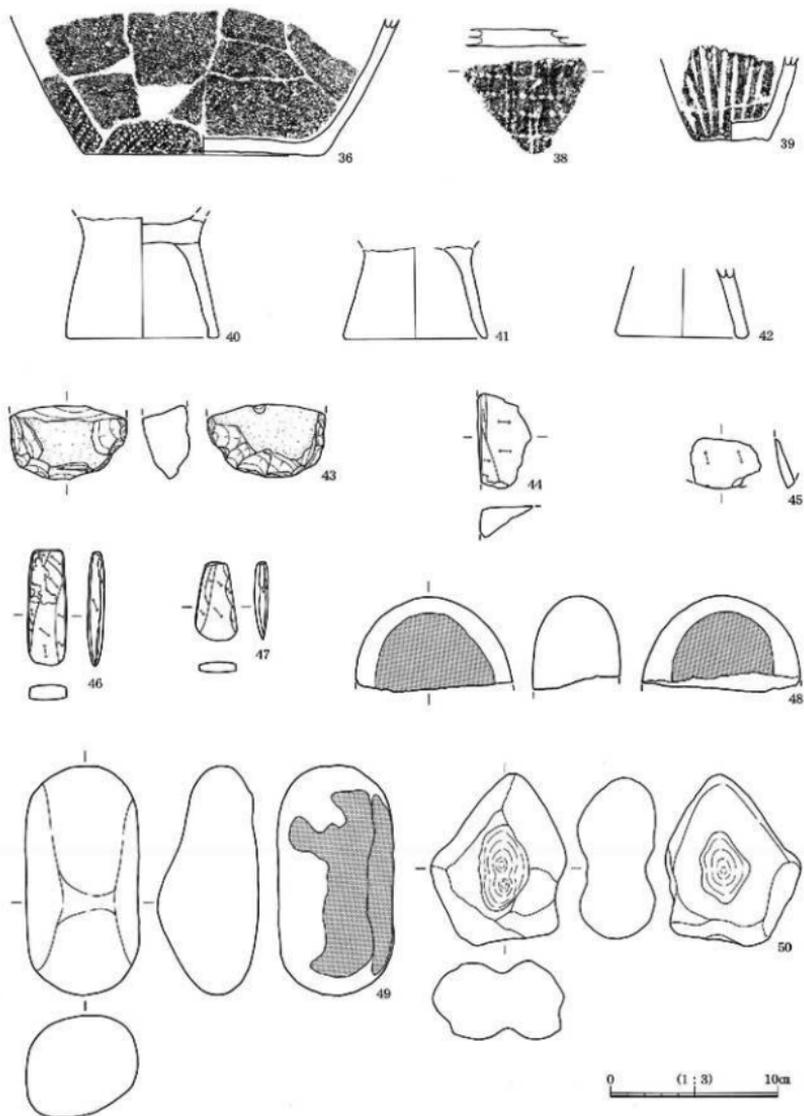


第20図 SI02出土遺物



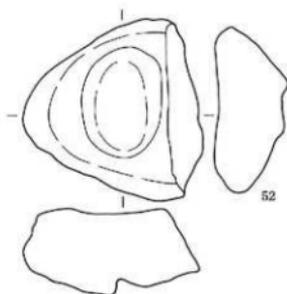
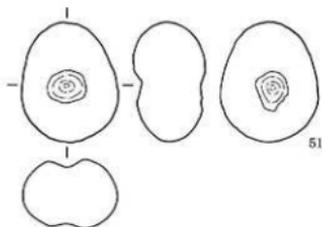
第21圖 SI03出土遺物(1)

SI03 (36・38~50)

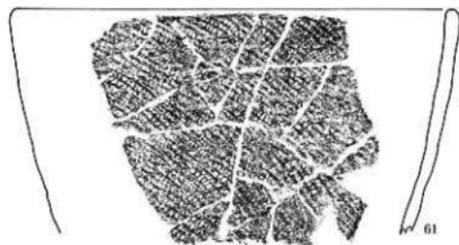
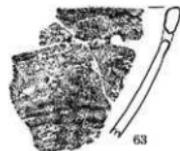
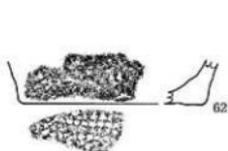
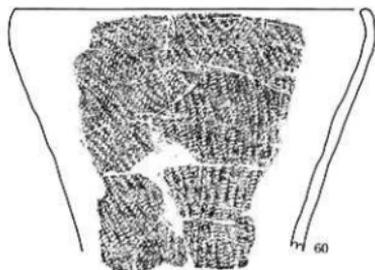
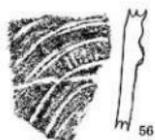
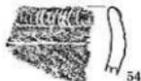


第22図 SI03出土遺物(2)

SI03 (51 - 52)



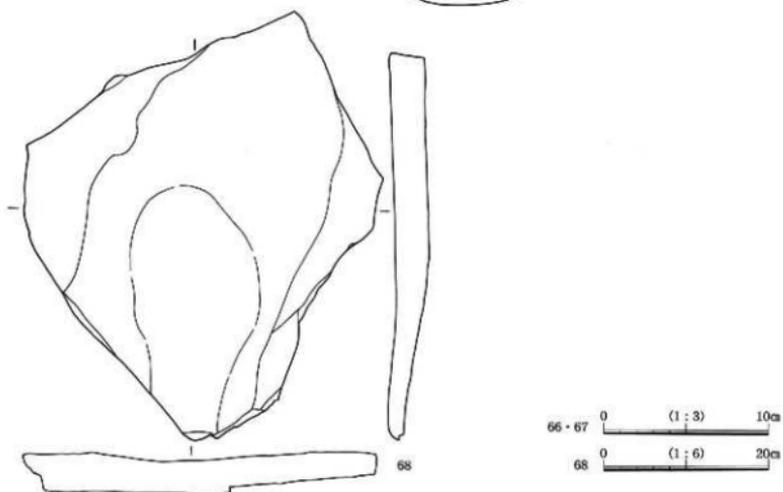
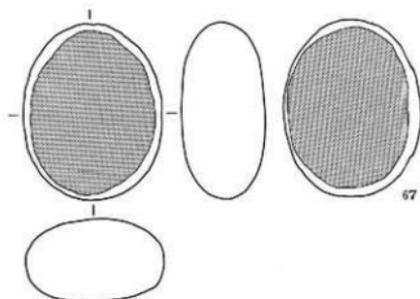
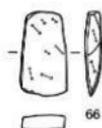
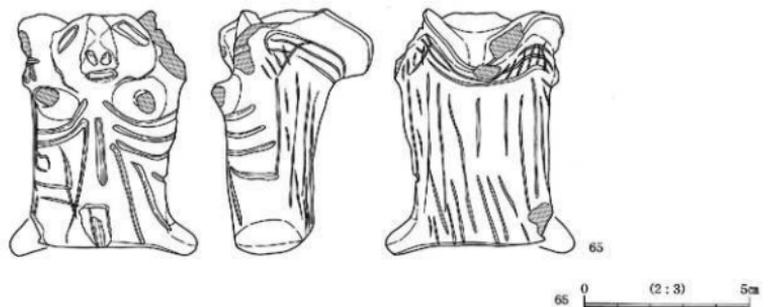
SI04 (53-64)



51・53~64 0 (1:3) 10cm
52 0 (1:6) 20cm

第23図 SI03 出土遺物 (3)・SI04 出土遺物 (1)

SI04 (65~68)



第24図 SI04 出土遺物 (2)

表4 開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡 石器計測表

遺構 番号	遺物 番号	器 種	計測値 (cm)				石 材	遺存部位	備 考
			長さ	幅	厚さ	重さ			
SI02	11	磨製石斧	(13.5)	5.7	2.4	(309.5)g	蛇紋岩	刃部欠損	定角式
SI02	12	磨製石斧	11.6	5.0	2.3	256.5g	蛇紋岩	完形	定角式
SI02	13	磨製石斧	10.8	5.0	2.4	215.0g	蛇紋岩	完形	定角式
SI02	14	磨製石斧	(9.2)	4.5	1.9	(143.9)g	蛇紋岩	刃部欠損	定角式
SI02	15	磨製石斧	(5.0)	5.9	(2.3)	(96.8)g	蛇紋岩	基部欠損	定角式
SI02	16	石錘	6.2	4.8	2.2	86.6g	石英斑岩	完形	礫石錘
SI03	43	打製石斧	(4.5)	(7.0)	(2.8)	(91.8)g	砂岩	刃部片	
SI03	44	磨製石斧					蛇紋岩	基部片	
SI03	45	磨製石斧					蛇紋岩	刃部片	
SI03	46	磨製石斧	7.0	2.2	0.9	26.2g	蛇紋岩	完形	小形品
SI03	47	磨製石斧	4.8	2.5	0.7	13.1g	蛇紋岩	完形	小形品
SI03	48	磨石	(5.8)	(9.5)	(5.2)	(357.9)g	砂岩	大半欠損	
SI03	49	磨石	14.0	6.8	6.2	870.8g	角礫岩	完形	
SI03	50	凹石	10.5	8.1	4.8	371.5g	輝石安山岩	完形	
SI03	51	凹石	7.4	5.8	4.3	212.8g	凝灰岩	完形	
SI03	52	石皿	22.7	21.8	10.8	4.92kg	角礫岩	完形	
SI04	66	磨製石斧	5.1	2.8	1.0	24.1g	蛇紋岩	完形	小形品
SI04	67	磨石	10.8	8.2	5.0	636.2g	石英斑岩	完形	
SI04	68	石皿	53.2	43.9	4.9	13.50kg	輝石安山岩	完形	台石か

は、高さ7.5cm以上、最大幅5.3cm以上、厚さ4.9cm以上である。66は定角式の磨製石斧で、小形品である。蛇紋岩製。67は磨石で、正裏面に磨面をもつ。石英斑岩製。68は石皿としたが、磨耗痕が顕著でなく、台石として用いられていた可能性もある。輝石安山岩製。

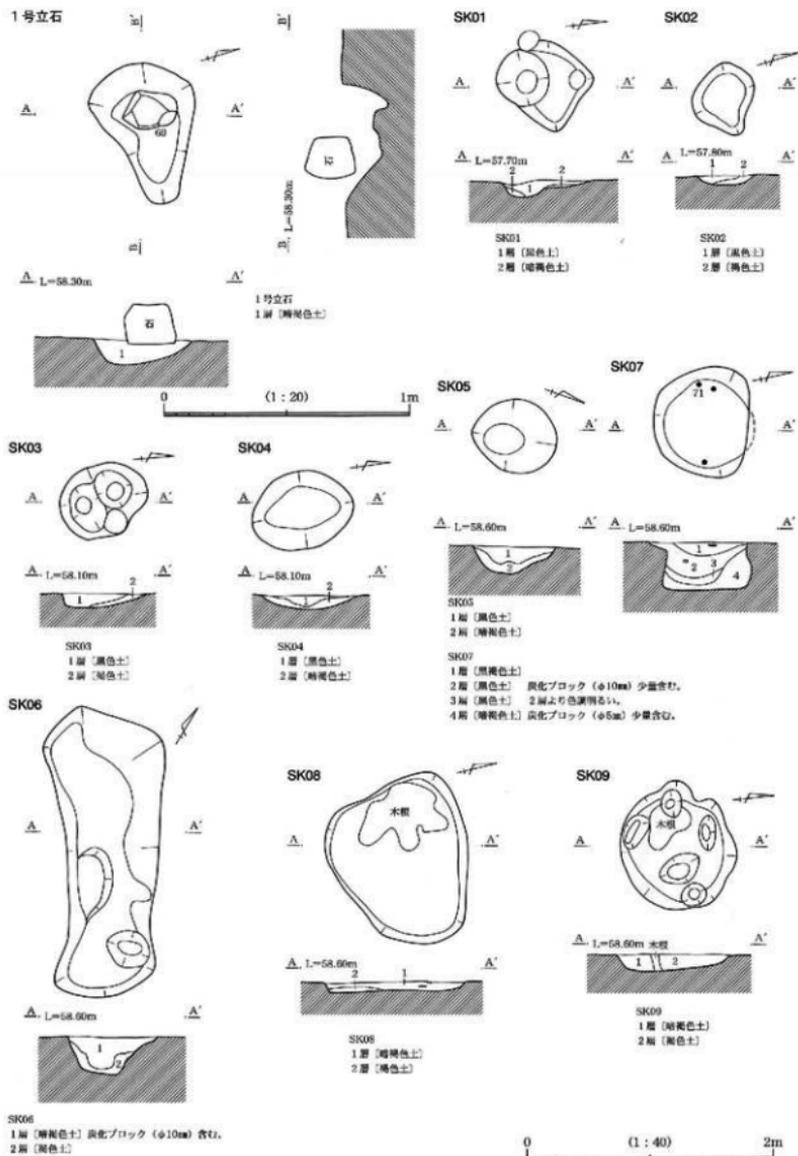
2. 立石

1号立石 (第25図、図版11)

調査区西側のX660, Y-940区から検出されている。不整形な浅い穴に、短い石が立ったような状況で検出されている。石には特に被熱痕などはみとめられない。小規模なもので判然としない部分もあるが、ここでは立石の可能性のあるものとして報告する。穴の規模は、長軸1.16m、短軸0.84m、深さ0.33mである。検出された石は花崗閃緑岩で、長さ17.5cm、幅22.5cm、厚さ17.9cm、重さ9.00kgである。

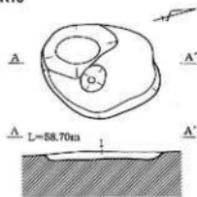
3. 土坑 (第25・26図、表5、図版11-13)

土坑は、竪穴住居跡の分布とほぼ重複して21基が検出されている。このうち、SK07・19の2基は断面形状が袋状を呈するものである。いずれも概して出土遺物が少なく、時期・性格については明瞭でない。各土坑の規模などについては表5に示した通りである。

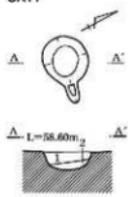


第25図 1号立石、SK01～09

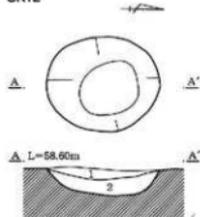
SK10

SK10
1層 [緑褐色土]

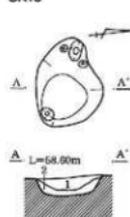
SK11

SK11
1層 [黒色土]
2層 [緑褐色土]

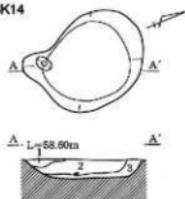
SK12

SK12
1層 [黒色土]
2層 [黒褐色土]

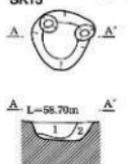
SK13

SK13
1層 [黒褐色土]
2層 [緑褐色土]

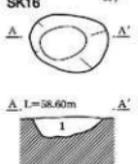
SK14

SK14
1層 [黄褐色土]
2層 [黒褐色土] 炭化ブロック (φ3~5mm) 含む。
3層 [灰色土] 炭化ブロック (φ3~5mm) 少量含む。

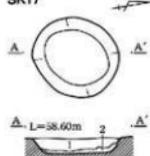
SK15

SK15
1層 [黒色土]
2層 [灰色土] 色調より明るい。

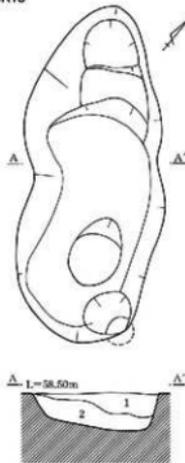
SK16

SK16
1層 [黒色土] 炭化材 (φ5mm) 少量含む。

SK17

SK17
1層 [黒褐色土]
2層 [褐色土]

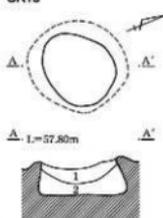
SK18



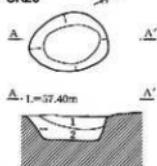
SK18

SK18
1層 [黒褐色土]
2層 [黒色土] 炭化ブロック (φ5mm) 少量含む。

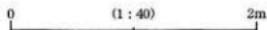
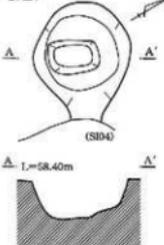
SK19

SK19
1層 [灰色土] 炭化ブロック (φ3~5mm) 少量含む。
2層 [黒色土] 黄褐色ブロック (φ5~10mm)、
炭化ブロック (φ3~5mm) 含む。

SK20

SK20
1層 [黒色土] 炭化ブロック (φ3mm) 少量含む。
2層 [黒褐色土] 黄褐色ブロック (φ3~10mm) 含む。

SK21

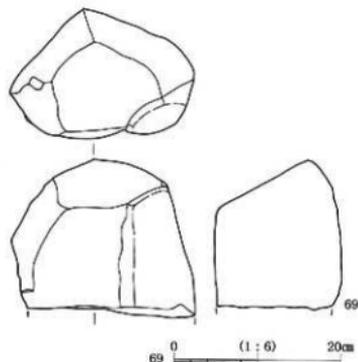


第26図 SK10~21

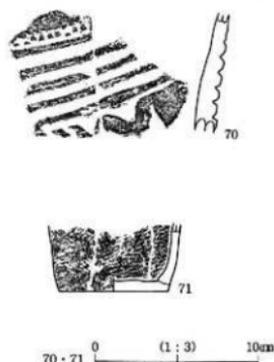
表5 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 土坑規模一覽表

遺構 番号	位置	平面形状	断面形状	計測値 (m)			長軸方位	備考
				長軸	短軸	深さ		
SK01	X670, Y-950	方形	皿状	0.70	0.60	0.14	N-37°-E	
SK02	X670, Y-940	円形	皿状	0.60	0.50	0.09	—	
SK03	X670, Y-940	円形	皿状	0.74	0.55	0.11	—	
SK04	X660, Y-940	楕円形	皿状	0.85	0.62	0.12	N-5°-W	
SK05	X670, Y-930	円形	鍋底状	0.70	0.57	0.22	—	
SK06	X670, Y-930	長楕円形	鍋底状	2.39	0.75	0.30	N-34°-W	中期
SK07	X670, Y-920	円形	袋状	0.90	0.80	0.40	—	中期中葉、袋状土坑
SK08	X670, Y-920	楕円形	皿状	1.37	1.11	0.07	N-88°-E	
SK09	X670, Y-920	円形	皿状	1.01	0.90	0.15	—	中期
SK10	X670, Y-920	円形	皿状	1.00	0.80	0.07	—	
SK11	X660, Y-920	円形	鍋底状	0.40	0.40	0.15	—	
SK12	X670, Y-910	円形	鍋底状	0.92	0.78	0.15	—	
SK13	X660, Y-920	円形	皿状	0.75	0.55	0.15	—	
SK14	X660, Y-920	円形	皿状	1.00	0.78	0.22	—	
SK15	X670, Y-910	円形	鍋底状	0.52	0.50	0.14	—	
SK16	X670, Y-910	楕円形	鍋底状	0.65	0.45	0.16	N-15°-E	
SK17	X670, Y-910	円形	皿状	0.70	0.64	0.13	—	中期
SK18	X670, Y-910	長楕円形	鍋底状	2.75	0.04	0.32	N-35°-W	
SK19	X670, Y-900	円形	袋状	0.63	0.55	0.32	—	袋状土坑
SK20	X670, Y-890	楕円形	鍋底状	0.65	0.47	0.22	N-21°-E	中期
SK21	X670, Y-900	円形	鍋底状	0.82	0.75	0.33	—	

1号立石 (69)



SK07 (70・71)



第27図 1号立石・SK07出土遺物

第3節 まとめ

本遺跡は、北へ向かって延びる舌状地形上に所在する。頂部にはわずかに平坦地があり、東側は境野新扇状地に臨む急角度の崖、西側は緩やかな斜面となっている。本調査地区は、この頂部平坦地に設定されている。

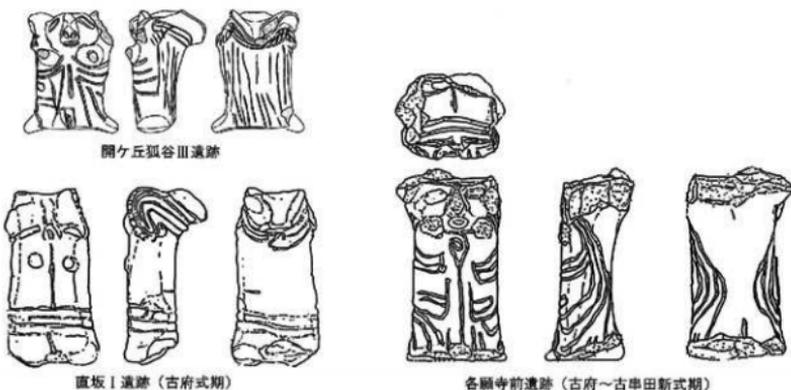
遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡4棟、立石1基、土坑21基が検出されている。竪穴住居跡の時期は、いずれも出土遺物から中期中葉（天神山～古府式期）と考えられる。

検出された竪穴住居跡のうち SI02と SI04の2棟は、屋内施設として、壁際に地山を掘り残してつくった低い棚状の段を有する点で共通した特徴をもっている。

同様の施設をもつ竪穴住居跡は、数は少ないが、県内では前期中葉から継続してみられる〔森・山崎ほか1990〕。中期中葉から後葉の類例としては、立山町の東黒牧上野遺跡A地区などがある。同遺跡では、検出された住居跡の約半数に、ほぼ同様の施設がみとめられる。また、この遺跡からは大量の土偶が出土しており、その性格については「東黒牧上野遺跡A地区は土偶を用いた祭祀を盛んに行った遺跡であるといえよう。」〔小松・橋本ほか2000, p.24〕としている。

今回の調査で出土した遺物のうち、特に注目すべきものとして、SI04から出土した土偶（65）がある。この土偶は、住居廃絶時に意図的に埋められた可能性のある石囲炉の上から、深鉢の大破片を敷いた上に仰向けに寝かされたような状況で出土している。この土偶の特徴として、①全体に扁平な円柱状を呈し、わずかに反り返る形状となる、②胴部の延長上に頭と顔を表現する、③頭部は額から後頭部にかけて窪ませる、④腕は付かない、⑤脚部は腰からそのまま両足を簡略化して表現する、⑥数条単位の沈線によって装飾される、などがあげられる。

これに類似した土偶は、大沢野町の直板I遺跡（古府式期）や婦中町の各願寺前遺跡（古府式～古串田新式期）などから出土している〔橋本1973、神保1988〕。なお、各願寺前遺跡出土の土偶は、頭部が皿状となるものである。ほかに松原遺跡や文殊寺神田遺跡などからも、これに近似した特徴をもつ土偶が出土しているが〔小島1974、神保1988〕、いずれも胴部側面に短い両腕が付く点でこれとは



第28図 土偶の類例 (S=1:3)

異なる。

本遺跡から出土した土偶の時期については、時期特定可能な遺物の伴出が乏しいため判然としないが、大まかに中期中葉の後半（古府式期）を想定している。

引用・参考文献

- 今橋浩一 1985 『阿玉台文化の一側面—二段床構造住居址の検討—』『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部
- 狩野謙・神保孝造 1995 『東黒牧上野遺跡 A 地区』 大山町教育委員会
- 小島俊彰 1974 『富山県庄川町松原遺跡試掘調査報告書』 富山県教育委員会
- 小松博幸・橋本正春・川藤暢宏 2000 『東黒牧上野遺跡 G 地区発掘調査概要』 大山町教育委員会
- 神保孝造 1988 『昭和63年度富山県埋蔵文化財センター第1回公開講座資料 富山の土偶』 富山県埋蔵文化財センター
- 神保孝造 1996 『北陸の様相』『中部高地をとりまく中期の土偶』土偶シンポジウム4 長野大会 『土偶とその情報』研究会
- 縄文時代研究班 1996 『関東地方における縄文時代中期の「有段式整穴遺構」について』『研究ノート』5号 (財)茨城県教育財団
- 縄文セミナーの会 1998 『中期中葉から後葉の諸様相』第11回縄文セミナー
- 富山市教育委員会 1973 『富山市北押川遺跡』
- 富山市教育委員会 1986 『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第8次緊急発掘調査概要—小杉丸山遺跡—』
- 富山市教育委員会 2000a 『富山市向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2000b 『富山市境野新・向野池遺跡』
- 富山市教育委員会 2002a 『富山市関ヶ丘中山Ⅲ遺跡・関ヶ丘中山Ⅳ遺跡・関ヶ丘中山Ⅴ・関ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002b 『富山市関ヶ丘中山Ⅰ遺跡・関ヶ丘中山Ⅳ遺跡・関ヶ丘中遺跡・関ヶ丘狐谷遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002c 『富山市向野池遺跡発掘調査報告書』
- 富山市教育委員会 2002d 『富山市粉谷南遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山市教育委員会 2003b 『富山市関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・関ヶ丘中山Ⅰ遺跡・関ヶ丘狐谷Ⅳ遺跡・関ヶ丘中山Ⅳ遺跡発掘調査報告書』
- 富山大学人文学部考古学研究室 1989 『越中上末窯』
- 西井龍儀 1979 『入門講座①先土器時代(1)』『富山市考古資料館報』No.1 富山市古資料館
- 西井龍儀・藤山富士夫 1976 『呉羽山丘陵周辺の先土器・縄文時代早期期の遺構について』『大境』第6号 富山考古学会
- 能都町教育委員会・真脇発掘調査団 1986 『真脇遺跡』
- 橋本正 1973 『富山県大沢町野直坂Ⅰ遺跡緊急発掘調査概要』 富山県教育委員会
- 郷中町教育委員会 2000 『外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 北陸古代土器研究会 1999 『つばとこめ』
- 森秀典・山崎典子・春日真実・小林武彦 1990 『古峰遺跡—第7次発掘調査報告書—』立山町文化財調査報告書第11冊 立山町教育委員会

附 章 自然科学分析

第1節 関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の微細物分析及放射性炭素年代測定

はじめに

関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡は、射水丘陵東部を構成する関ヶ丘丘陵北東部の緩斜面上に位置している。本報告では、検出された縄文時代の住居跡内の炉の土壌について、微細物分析を行い、植物質食糧等に関する情報を得る。また、微細物分析によって得られた炭化材の年代測定を行い、遺構の年代についての情報を得る。

1. 試料

試料は、縄文時代の住居跡内の炉から採取された土壌3点（SI01、SI02、SI04）である。年代測定は、微細物分析結果にあるように、SI02とSI04で0.1gを超える（乾燥重量による）炭化材が検出されたことから、これらについて分析を行った。

2. 方法

(1) 微細物分析

各土壌試料の半分程度（SI01は75cc、SI02は200cc、SI04は400cc程度）を水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。抽出した植物遺体を48時間40℃で乾燥後、形態的特徴から種類を同定し、乾燥重量を求める。分析後の植物遺体等は、乾燥剤とともに種類毎にビンに入れて保存する。

(2) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、 $\delta^{13}C$ の値は加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度（ $^{13}C/^{12}C$ ）を測定し、標準試料PDB（白亜紀のペレムナイト類の化石）の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差（‰；パーミル）で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,570年を使用した。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。

表2 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	補正年代	$\delta^{13}C$	測定年代	Code. No.
SI-02	炭化材	4,200±60BP	-20.46±2.22‰	4,120±40BP	IAAA-30432
SI-04	炭化材	4,150±40BP	-15.37±1.09‰	3,990±40BP	IAAA-30433

- 測定は、加速器質量分析法（AMS法）
- 年代は、1950年を基点とした年数で、補正年代は $\delta^{13}C$ の値を基に同位体効果による年代誤差を補正した値。
- 放射性炭素の半減期は、5,568年を使用した。

表1 微細物分析結果

試料名	分析量(cc)	種類名	個数	乾燥重量(g)
SI01	75	炭化材	破片	0.03
		不明炭化物	破片	+
SI02	200	炭化材	破片	0.17
		不明炭化物	破片	+
SI04	400	炭化材	破片	0.55
		不明炭化物	破片	+
		菌核	3	+

注) +は0.01g以下を示す

3. 結果

(1) 微細物分析

微細物分析結果を表1に示す。篩別後の残渣からは、同定可能な種実遺体は検出されない。炭化材は2～3mm以下の細かなものを中心に検出される。不明炭化物は、木材組織が認められない、部位・種類不明の炭化物を示す。菌類の菌核は、おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる。

(2) 放射性炭素年代測定

結果を表2に示す。同位体補正を行った年代値で見ると、両者とも約4,200年前の値を示し、測定誤差が重複するほど近似する。

4. 考察

土壌の微細物分析の結果、住居跡内の炉の土壌からは炭化材と炭化物が確認された。不明炭化物は、微量で炭化が著しく、保存が悪いことから、その形態から由来を知ることは難しい。

本遺跡周辺では、開ヶ丘中山Ⅲ遺跡の縄文時代の住居跡出土炭化材にクリが認められている（バリノ・サーヴェイ株式会社，2002）。クリは、果実が生食可能であり、オニグルミやトチノキと共に縄文時代の最も重要な植物食糧の一つとされ、栽培による植物資源活用が行われていたことも指摘されている（稻川，1983；千野，1983）。しかし、本地域では、縄文時代における古植生やクリ栽培等に関する情報は蓄積段階であり、現時点では詳細は不明である。今後、炭化材や炭化種実の分析例を蓄積し、古植生や植物利用に関する検討を行っていきたい。

年代測定値は近似し、これらの遺構の構築年代はほぼ同時期の可能性がある。約4,200年前は縄文時代中期にあたるが、出土遺物や遺構の時代観などと比較検討することが望まれる。

（バリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

- 千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生。一南関東地方を中心に。東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42。
- 稻川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧。加藤晋平・小林達雄・森本強編「縄文文化の研究2 生業」，p.42-49，雄山閣。
- バリノ・サーヴェイ株式会社（2002）自然科学分析。「富山市埋蔵文化財調査報告書119 富山市開ヶ丘中山Ⅲ遺跡・開ヶ丘中山Ⅳ遺跡・開ヶ丘中山Ⅴ遺跡・開ヶ丘狐谷遺跡 発掘調査報告書 一県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)」。p.32-40，富山市教育委員会。

第2節 開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡における蛍光X線分析

1. 試料

試料は、開ヶ丘中遺跡から出土した須恵器5点と土製品1点および開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡から出土した縄文時代中期土器4点の計10点である。試料の詳細を図1に示す。

2. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子(株)製, JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。以下に分析の手順を示す。

- 1) 土器片を流水中で研磨洗浄（釉薬を除去）
- 2) 絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定
- 3) 測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の竹球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

3. 分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を、表1および図1に示す。また、図2にCaO-K₂O分布図およびRb₂O-SrO分布図を示す。

4. 考察

土器（胎土）に含まれる元素のうち、カリウム（K）、カルシウム（Ca）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）の4元素は、土器胎土の地域性を示す有効な因子とされている（三辻, 1999）。土器の産地同定を行う際の指標の一つとされているCaO-K₂O分布図（図2左）によると、ほとんどの試料がカルシウム（CaO）含量が0.5%未満、カリウム（K₂O）含量が2.0~3.5%の比較的狭い領域に含まれており、開ヶ丘中遺跡の試料41および開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の試料1の2点は、この領域から明らかにはずれている。また、Rb₂O-SrO分布図（図2右）によると、ほとんどの試料がストロンチウム（SrO）含量が0.02%未満の領域に含まれており、開ヶ丘中遺跡の試料41および開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の試料1の2点は、この領域から明らかにはずれている。

以上のように、CaO-K₂O分布図およびRb₂O-SrO分布図から判断すると、開ヶ丘中遺跡の試料41（須恵器壺）、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の試料1（縄文時代中期土器）、およびその他の8試料は、それぞれ素材となった粘土の給源が異なっている可能性が考えられる。今回は、複数の元素の組み合わせによる統計的な検討は行わなかったが、今後このような基礎的なデータを蓄積することで、土器の産地を推定するための手がかりが得られるものと期待される。

なお、開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の縄文時代中期土器のうち、試料4と試料17の2点ではリン（P）が特徴的に検出され、リン酸（P₂O₅）の含量は2.0~2.2%と高い値を示している（図1）。一般に、未耕地の土壤中におけるリン酸含量は0.1~0.5%程度、耕地土壌でも1.0%程度であることから、これらの土器胎土にはリン酸が明らかに多く含まれている。リン酸の給源としては、土器使用の際の食物の成分などが考えられるが、これについては考古学的所見ともあわせてさらに詳細な検討が必要と考えられる。
（株式会社古環境研究所）

引用文献

- 三辻利一（1998）元素分析による古代土器の胎土研究。人類学研究第10号、11-39。
三辻利一（1999）元素分析による須恵器の産地推定。考古学と自然科学（4）、同成社、p.294-313。

表1 開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡における蛍光X線分析結果

単位: wt(%)

原子No	地点・試料 化学式	開ヶ丘中遺跡						開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡			
		2	24	19	41	11	18	1	4	17	46
12	MgO		0.23				0.73		0.68	0.27	
13	Al ₂ O ₃	22.54	22.77	21.91	18.12	26.14	20.80	24.63	19.76	23.18	23.15
14	SiO ₂	67.52	67.44	68.35	67.36	66.32	66.48	61.72	60.96	60.12	67.14
15	P ₂ O ₅								2.01	2.20	
16	SO ₃	0.65						0.65		0.11	0.34
19	K ₂ O	2.62	3.23	2.45	4.81	2.49	2.61	1.74	2.27	2.88	2.93
20	CaO	0.20	0.48	0.32	0.97	0.34	0.17	0.92	0.33	0.41	0.17
22	TiO ₂	1.49	1.24	1.08	1.48	1.21	1.65	1.60	1.73	1.84	1.60
23	V ₂ O ₅	0.02	0.04	0.03	0.06	0.04	0.02	0.05	0.07	0.05	0.04
25	MnO										0.09
26	Fe ₂ O ₃	4.88	4.48	5.76	7.08	3.36	7.34	8.52	12.06	8.74	4.54
37	Rb ₂ O	0.02	0.02	0.02	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.03	0.01
38	SrO	0.01	0.02	0.01	0.03	0.01	0.01	0.04	0.01	0.02	0.01
40	ZrO ₂	0.05	0.05	0.05	0.07	0.06	0.09	0.09	0.09	0.08	0.05

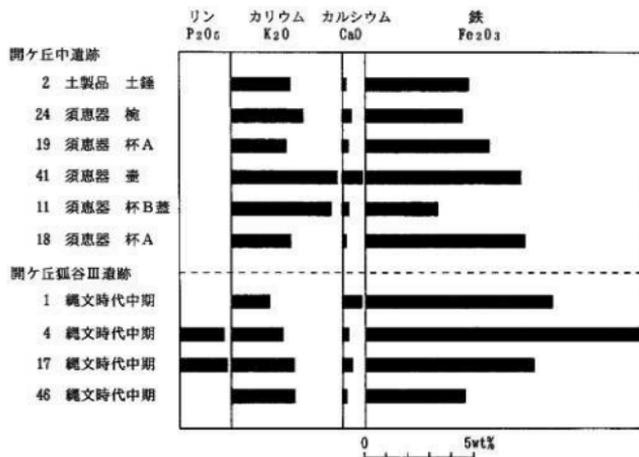


図1 開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡から出土した土器等における4元素の検出状況

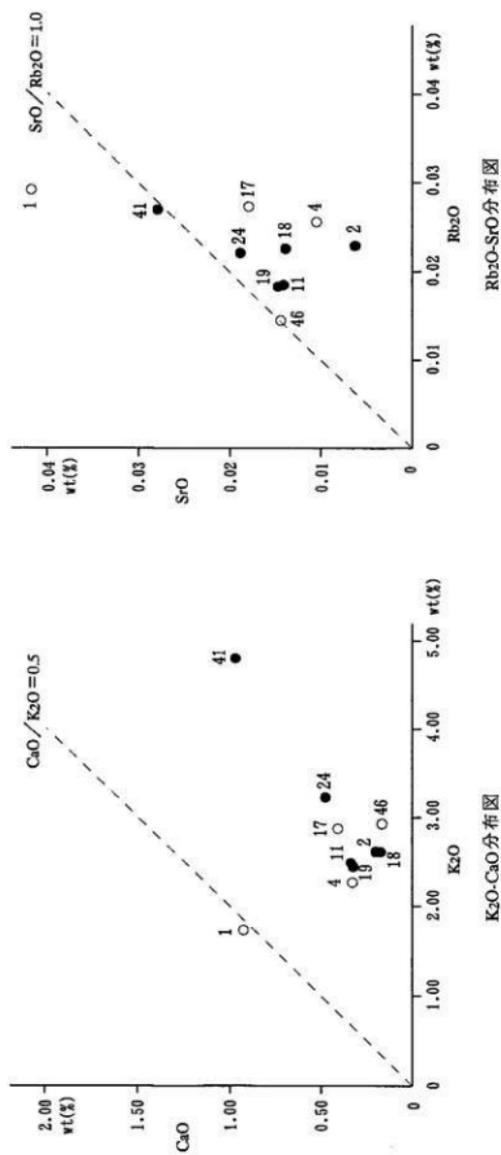


図2 開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷III遺跡から出土した土器等におけるK₂O-CaO分布図およびRb₂O-SrO分布図

写 真 图 版

開ヶ丘中遺跡

図版
1
(遺構)



1. 開ヶ丘中遺跡 全景 (東上空から)



2. 開ヶ丘中遺跡 全景 (南上空から)

開ヶ丘中遺跡

図版2
(遺構)



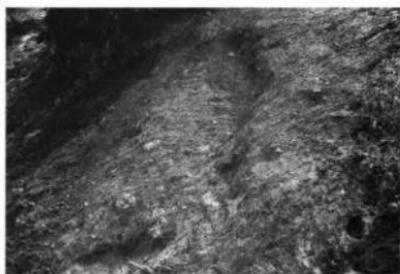
1. SK128 遺物出土状況 (北から)



2. SK129 遺物出土状況 (北から)



3. SK130 遺物出土状況 (北から)



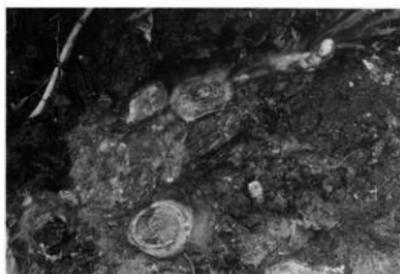
4. SK131 遺物出土状況 (北から)



5. SK132 遺物出土状況 (北から)



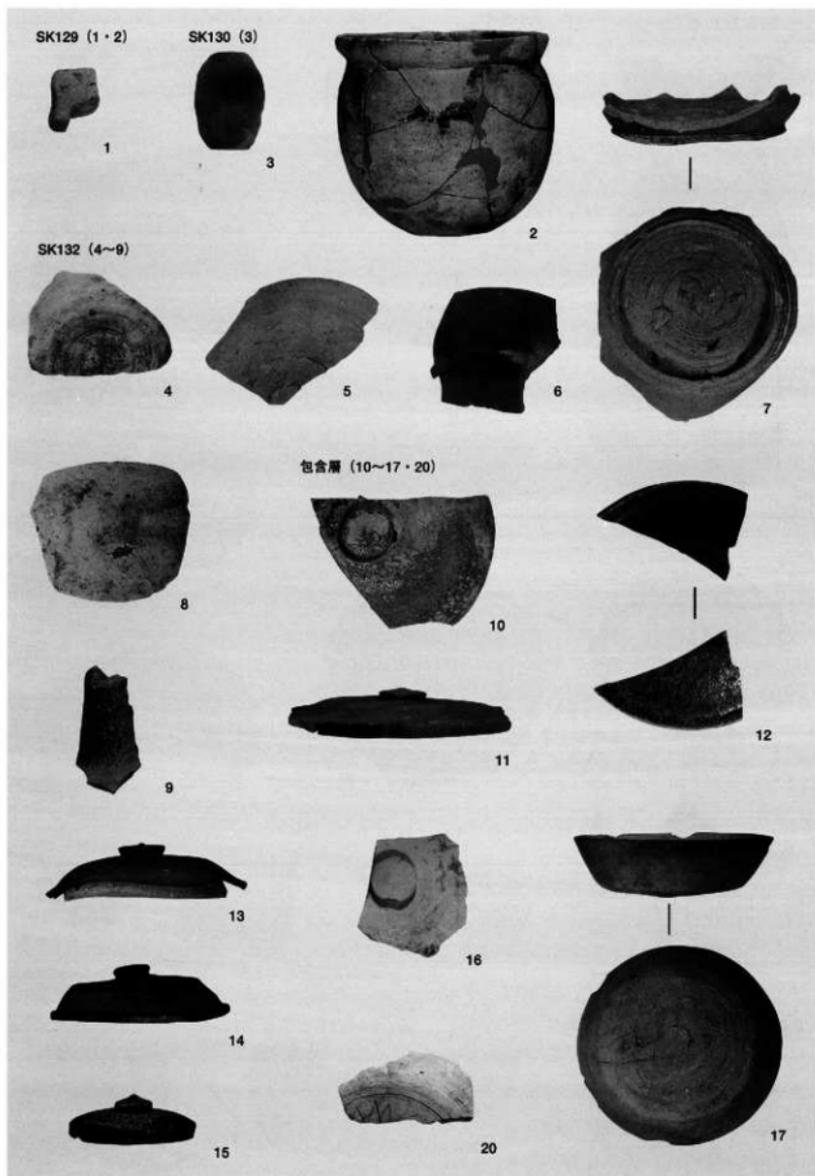
6. 埋没小支谷包含層(X590,Y-120)遺物出土状況(東から)



7. 埋没小支谷包含層(X590,Y-120)遺物出土状況(東から)



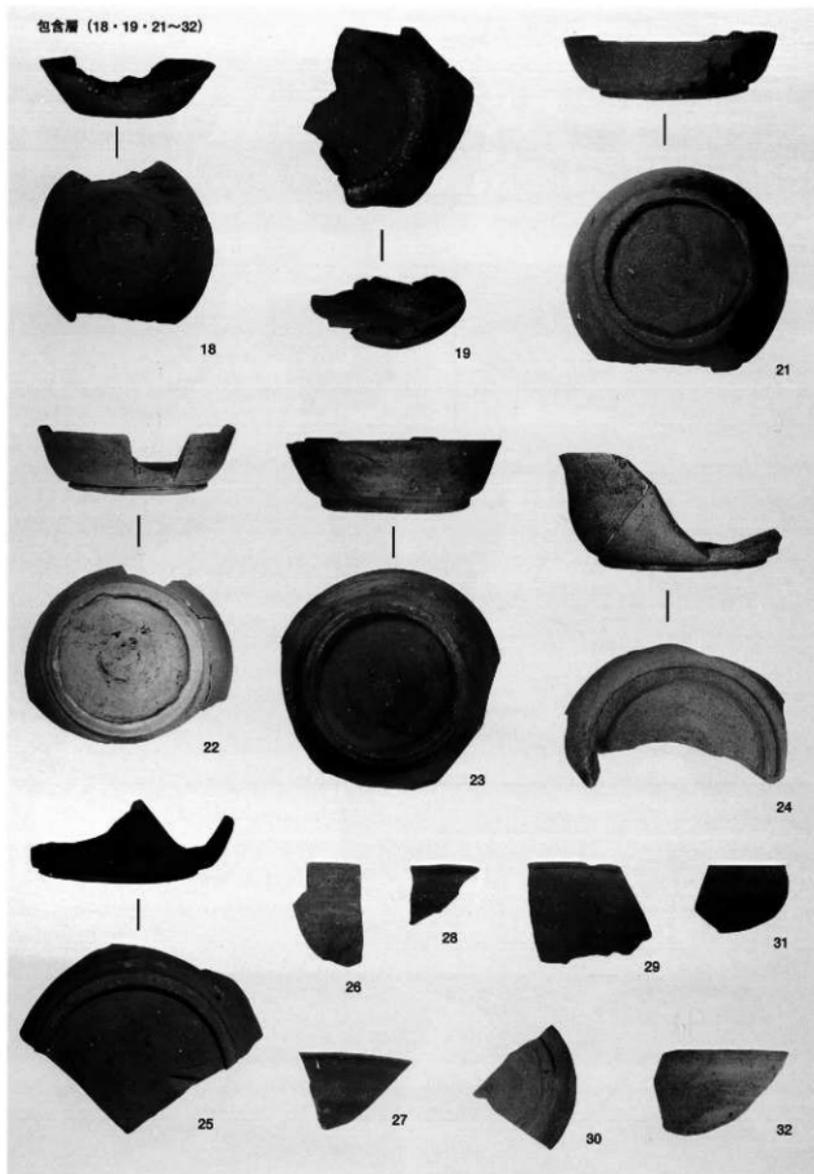
8. 谷底包含層(X590,Y-130)遺物出土状況(南から)



開ヶ丘中遺跡

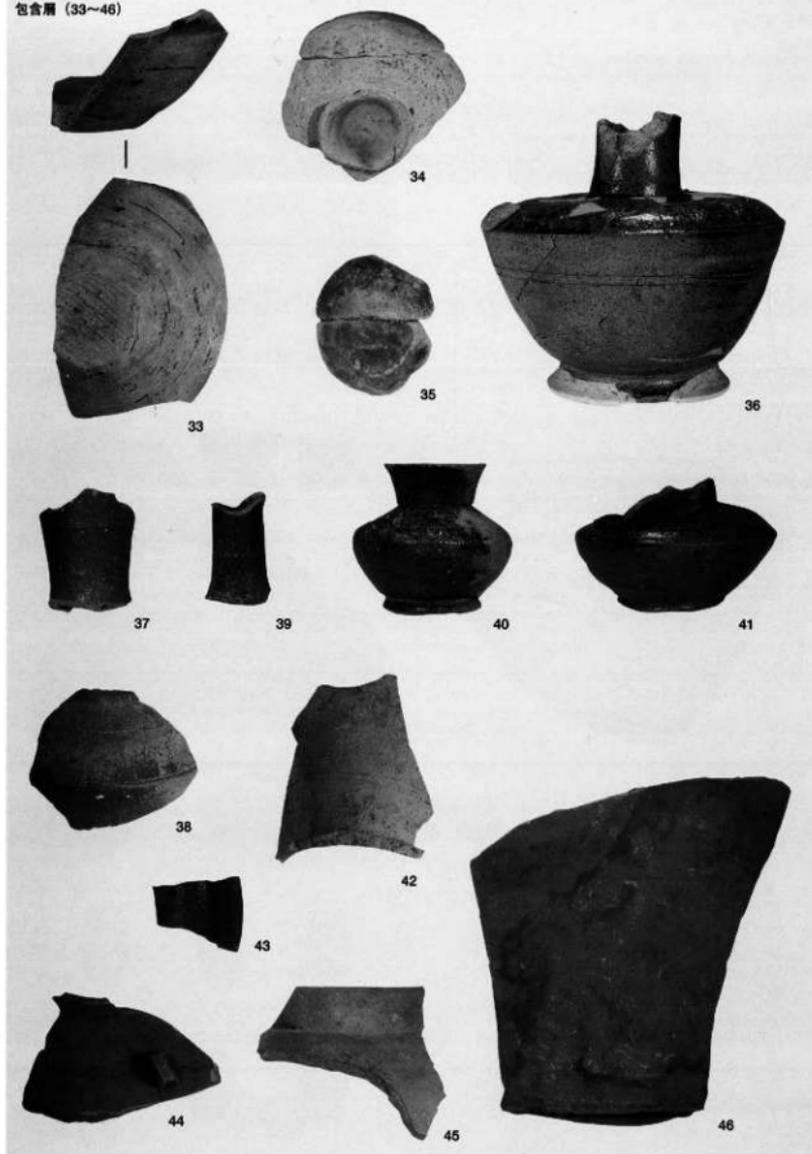
図版4
(遺物)

包含層 (18・19・21~32)



包含層出土遺物(2)

包含層 (33~46)

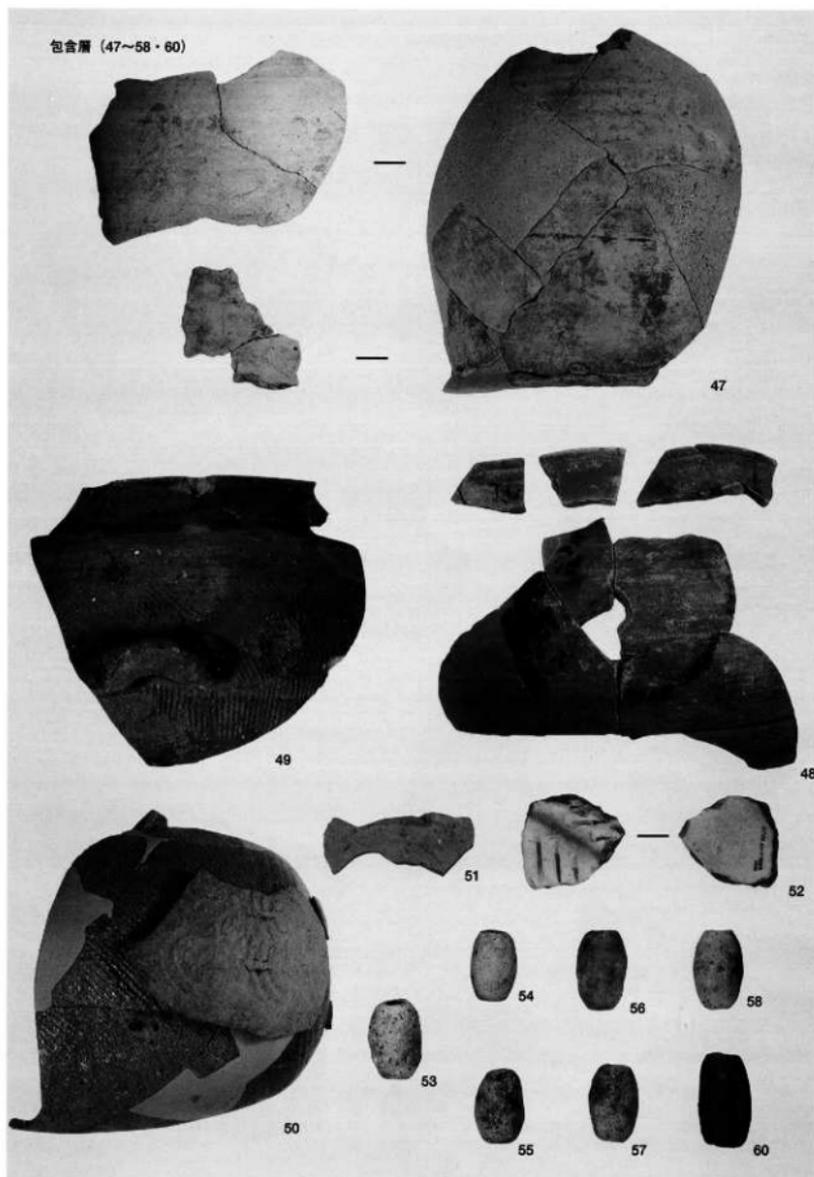


包含層出土遺物(3)

開ヶ丘中遺跡

図版
6
(遺物)

包含層 (47~58・60)



包含層出土遺物(4)

開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

図版
7
(遺構)



1. 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 遠景 (南東上空から)



2. 開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡 全景 (真上上空から)

開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

図版
8
(遺構)



1. SI02 遺物出土状況 (北東から)



2. SI02 遺物出土状況 (東から)



3. SI02 遺物出土状況 (西から)



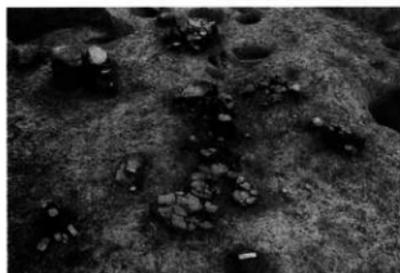
4. SI02 石囲炉 (南東から)



5. SI02 全景 (南東から)



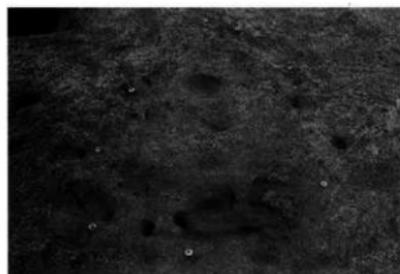
1. SI03 遺物出土状況 (南西から)



2. SI03 遺物出土状況 (南西から)



3. SI03 遺物出土状況 (南から)



4. SI03 炉 (北東から)



5. SI03 完掘状況 (北東から)

開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

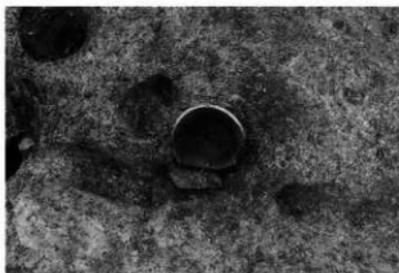
図版
10
(遺構)



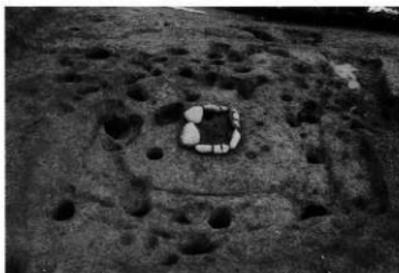
1. S104 遺物出土状況 (南から)



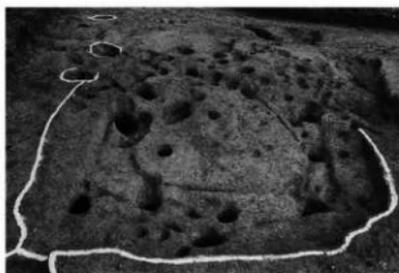
2. S104 石囲炉 (南から)



1. SI04 遺物出土状況 (東から)



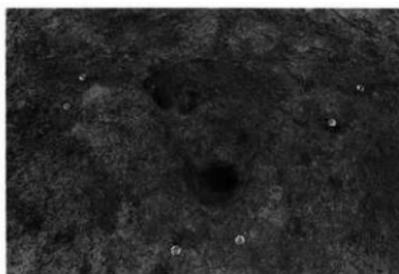
2. SI04 全景 (西から)



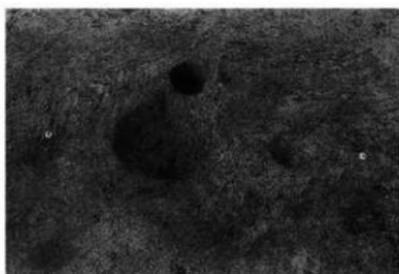
3. SI04 完掘状況 (西から)



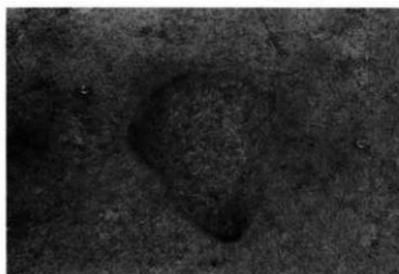
4. 1号立石 検出状況 (東から)



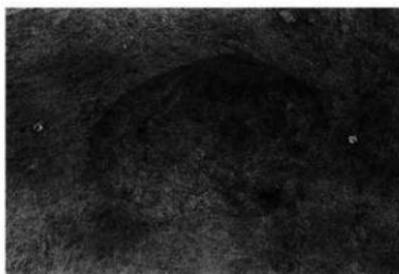
5. 1号立石 完掘状況 (東から)



6. SK01 完掘状況 (東から)



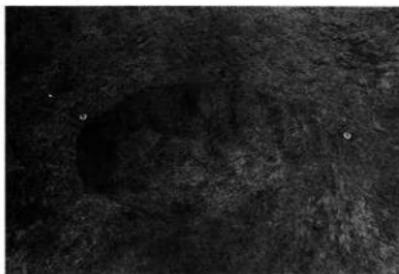
7. SK02 完掘状況 (東から)



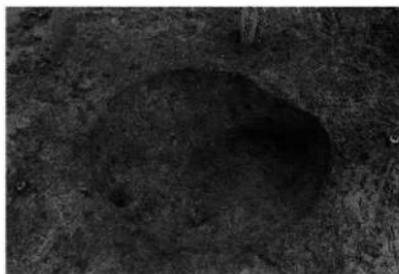
8. SK03 完掘状況 (東から)

開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡

図版12
(遺構)



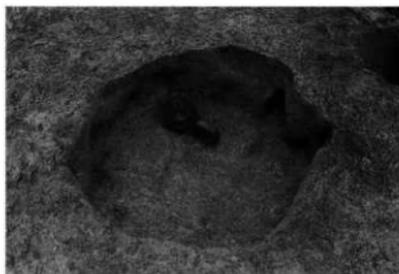
1. SK04 完掘状況 (東から)



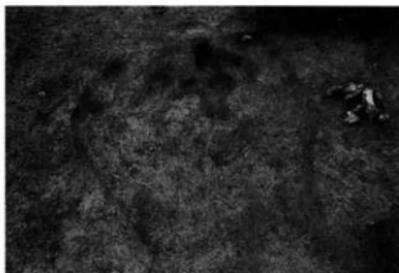
2. SK05 完掘状況 (西から)



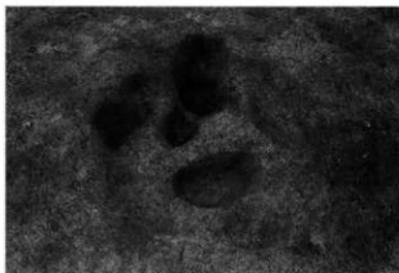
3. SK06 完掘状況 (東から)



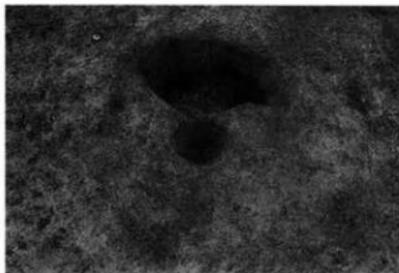
4. SK07 完掘状況 (西から)



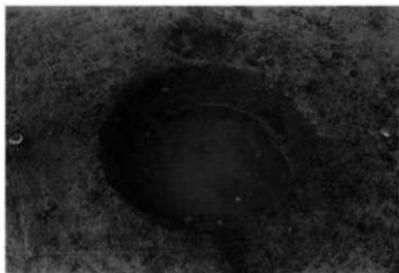
5. SK08 完掘状況 (東から)



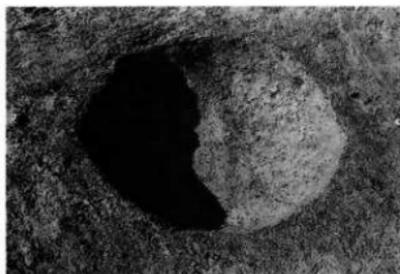
6. SK09 完掘状況 (東から)



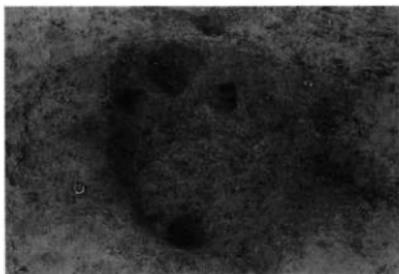
7. SK10 完掘状況 (東から)



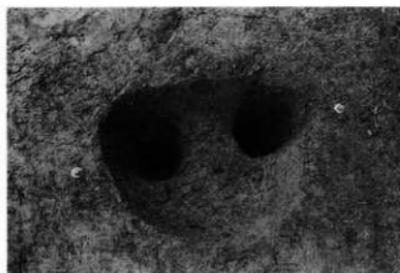
8. SK11 完掘状況 (東から)



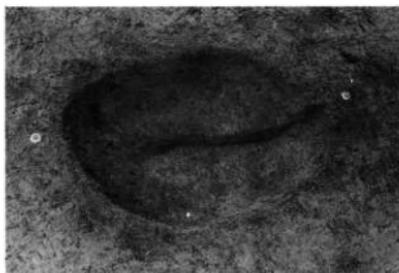
1. SK12 完掘状況 (東から)



2. SK13 完掘状況 (東から)



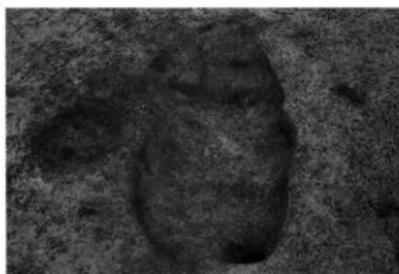
3. SK15 完掘状況 (東から)



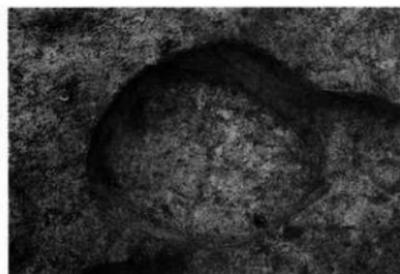
4. SK16 完掘状況 (東から)



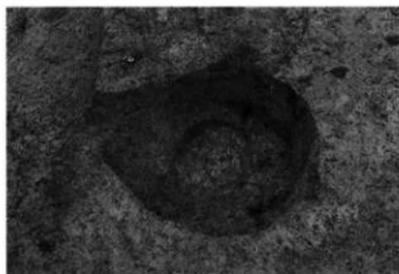
5. SK17 完掘状況 (東から)



6. SK18 完掘状況 (東から)



7. SK19 完掘状況 (東から)

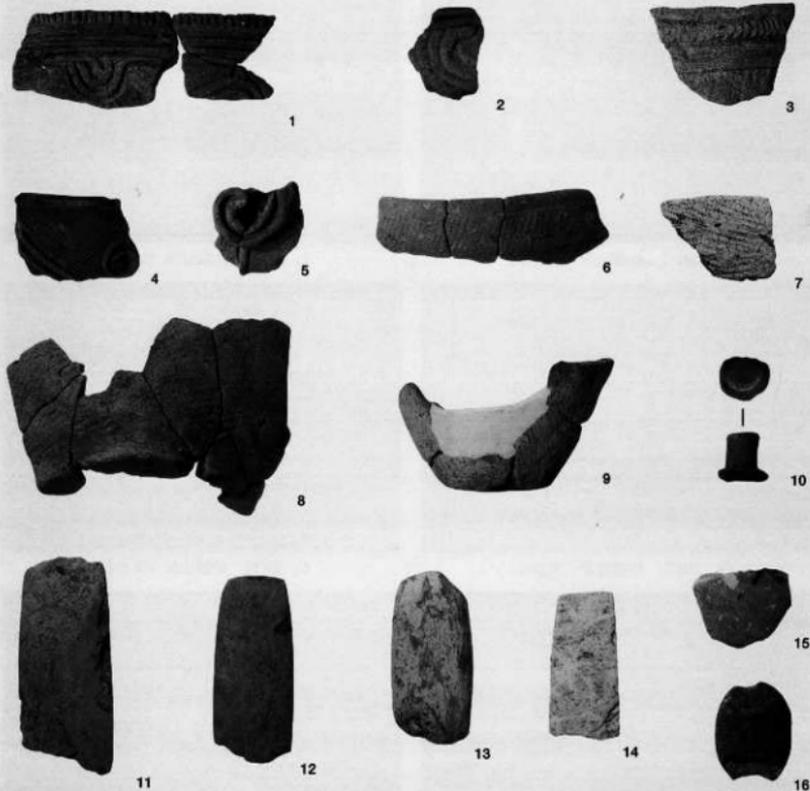


8. SK21 完掘状況 (北から)

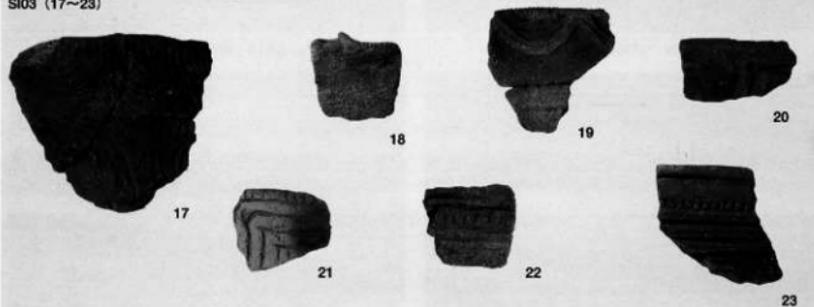
開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡

図版
14
(遺物)

SI02 (1~16)



SI03 (17~23)



SI03 (24~42)



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41

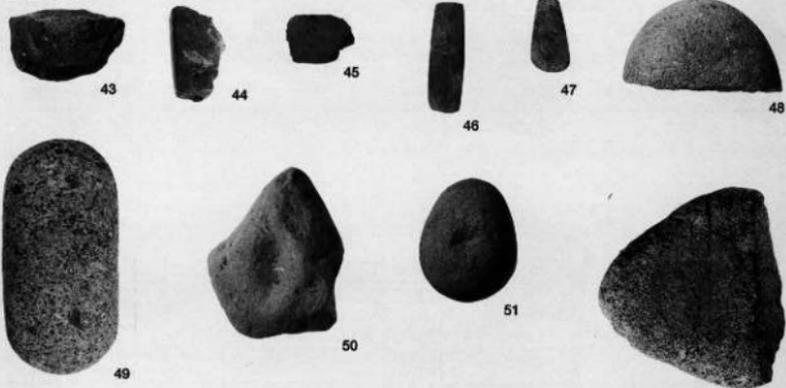


42

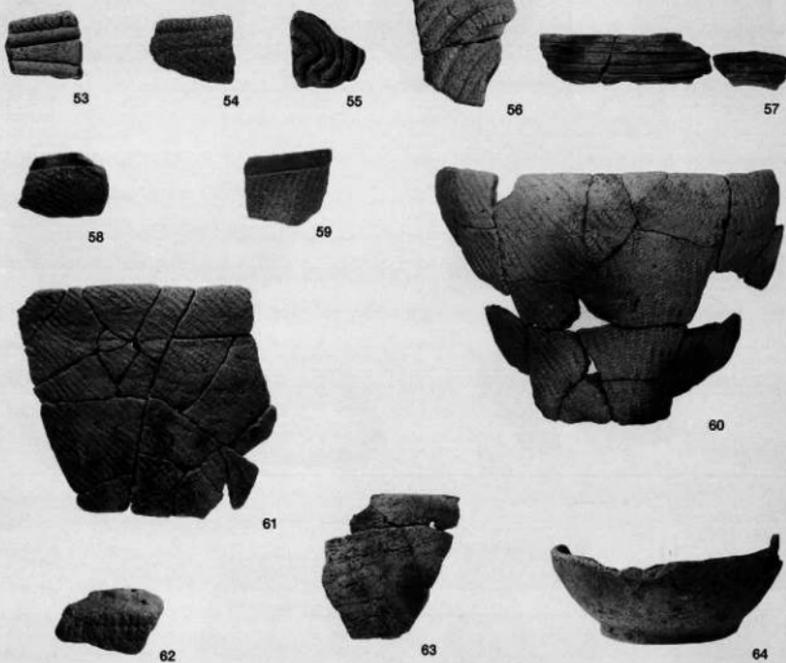
開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡

図版
16
(遺物)

SI03 (43~52)



SI04 (53~64)



SI04 (65~68)



|



65

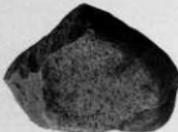


66



67

1号立石 (69)



|



69

SK07 (70・71)



70



71



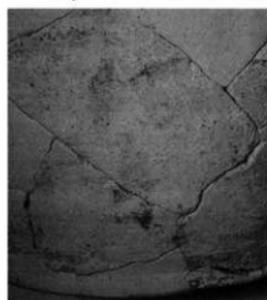
68

開ヶ丘中遺跡

図版 18
(遺物)
(墨書土器)



本体



本体左側面

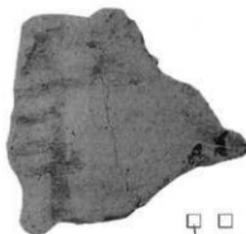


破片1 (肩部)



破片1右側

□ □
□ □
□ □
□ □
寺
平
方



破片2 (胴下半部)



年
方



破片3 (胴下半部)

墨書土器 (47 土師器壺) 赤外線写真

抄 録

ふりがな	とやまし ひらきがおかないせき・ひらきがおかきつねだにさんいせき はつくちようさほう こくしょ								
書名	富山市関ヶ丘中遺跡・関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書								
副書名	県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査								
巻次	(6)								
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	128								
編著者名	近藤顕了・桐谷 優・武部喜光・土生朗治・湯原勝夫								
編集機関	富山市教育委員会埋蔵文化財センター 〒930-0803 富山県富山市下新本町5-12 TEL.076-442-4216								
発行機関	富山市教育委員会								
発行年月日	西暦2003年3月28日								
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査担当者	調査原因
関ヶ丘中遺跡	富山市関ヶ丘 宇紙袋田94-1外	16201	449	36度 40分 20秒	137度 7分 14秒	20021111 ～ 20021225	1,750m ²	平岡和夫 武部喜光	県営畑地帯総合整備事業
関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	富山市関ヶ丘 字狐谷152外	16201	455	36度 40分 23秒	137度 7分 22秒	20021111 ～ 20021225	1,000m ²	平岡和夫 桐谷 優	県営畑地帯総合整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
関ヶ丘中遺跡	集落跡	奈良・平安時代	土坑4基、焼燐土坑1基		土師器、須恵器、墨書土器、瓦塔、土鍾、馬形土製品		瓦塔等仏教関連遺物が出土。		
関ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡4棟、立石1基、土坑21基		縄文土器、耳栓、土偶、磨製石斧、磨石、凹石、石皿、台石		中期中葉の集落跡。S104の石囲炉から土偶が仰向けに置かれたような状況で出土。		

富山市埋蔵文化財調査報告128

**富山市開ヶ丘中遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡
発掘調査報告書**

—県営畑地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6)—

2003(平成15)年3月28日発行

発行 富山市教育委員会
編集 富山市教育委員会埋蔵文化財センター
〒930-0803
富山市下新本町5番12号
Tel 076-442-4246
Fax 076-442-5810
E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.toyama.jp
印刷 ㈱文化総合企画
Tel 0476-93-0593

